

## 【卒業論文】

# 楽しい音楽の授業のための 集団構成についての研究

94503K 伊藤 正子

## はじめに

学校という場には多くの集団が存在する。学校の授業は通常、学級という集団で行われるが、この学級という学習集団もまた、そのときそのときの児童の活動によって、二人であったり、少人数のグループであったり学級全体であったりと様々である。こういった集団が形成されるのは、児童が自然に集まってできるときもあるが、教師による「となりの人と相談してやりなさい」「班になってやりなさい」というような指示によるときもある。教師は普通、「～しましょう」あるいは「～しなさい」といった、与える課題あるいは行わせる活動を児童に示すとき、同時にそれを行う集団の形を児童に指示することが多いように思われる。

教師が児童に対してこのような指示を出すのは、授業を進めるのに都合が良く、学習効果があるからというだけではなく、その活動形態によって何かを、例えば自分なりの意見や協調性、あるいは自主性などを得たり、身につけたりすることができ、集団によって人間的な成長も促すことができると考えているからであり、また児童も一人ではなく、誰かとすることで「楽しい」という気持ちに限らず、何らかの快感が得られるために、集団を形成するのではないだろうか。

他の教科と同様に、音楽の授業でも様々な集団形態が見られる。学級を二つに分けて輪唱をしたり、パートやグループに分けて合唱・合奏をしたり、二人でリコーダーの練習をして聴きあったりする。すべての活動を学級全体で、あるいは個人だけで行っている授業は皆無といえるのではないだろうか。しかし果たして、その授業でしばしば用いられるその集団形態で音楽

的活動を行うことは、本当に児童にとって楽しい、快いといった感情をもたらしているのだろうか。

現代はかつてよりも社会全体が急速に変化し、また核家族化が進む中で子供たちは人付き合いが苦手になっており、それによっていじめや家庭内暴力、不登校といった弊害が増加しているといわれる。こういった現状の中で学校教育の見直しが行われているが、普段学校で行われている授業で楽しい音楽の授業を行うためには、こういった集団で行うのが望ましいのだろうか。

本論文は、楽しい音楽の授業のためにどのような集団形態がより望ましいか研究する。このことから改めて、学校・学級といった、児童の集団としての形を見直し、音楽の授業の在り方を考えたい。

## 第一章 集団

## 第1節 集団について

## 1、集団とは

「集団」とは、「多くの人や物のあつまり（group）規則的・持続的な相互関係を持つ個体の集合。団体。」（広辞苑）という意味である。また、田中熊次郎氏は、「集団とは二人以上の個人の心理的相互関係の集合システムであり、変容可能性を内在しているものである。」（注1）と、集団の心理学的定義づけをしている。

## 2、集団構造

集団は、集団を構成する人々（成員）の相互作用の体系であり、これを維持するには比較的

安定した組織が必要とされる。つまり、「一定の環境下で複数の人びとの相互作用が反復維持されるように社会的行動を誘導しそれを維持し規制する要素が組織がされた状態」を、集団構造 (group structure) という。(注2)

集団構造は、報酬、地位、役割、規範という下位体系要素から構成されている。これらの要素は、以下のように構成されている。最初に報酬の体系によって個人を集団成員として定着させ、集団目標の達成へとかりたてる。そして地位体系によって人間関係を安定させ、集団的意思伝達を可能にする。役割の体系は、集団機能の分担であり、分業の体系でもある。規範の体系は、集団生活のためのルールと、集団成員に共通した価値判断の組織化されたものである。これらの体系が集団の目的達成や外的環境への適応に関連づけられて組織化される場合は公式構造、人間関係の維持や連帯の維持に関連づけられて組織化される場合を非公式構造という。

児童が自然発生的に集まってできた集団は、非公式構造によるものが多いと考えられる。

### 3、個人と集団の関係

個人と集団の関係は様々である。例えば、ある児童がその集団の中で中心的な役割をもっていたならば、その児童はその集団の実質的な成員であるといえるし、反対に名義だけ外面的に所属しているような場合のときもあるだろう。逆に、集団がその児童を受け入れているときがあれば、疎外している場合もあるだろう。

一般に、一つの集団でも外面的な関係構造と内面的な関係構造とは必ずしも一致しない(注3)とされている。例えばある学級を見ても、外面的にはまとまっているようでも、実はその中で対立していたり仲間はずれがあったりする。そのため、教師は児童集団の一面だけを見るのではなく、さまざまな角度から児童に対する認識をもつ必要がある。

### 4、対人関係

集団における個人と個人との心理的な関係のこと(注4)を、対人関係 (interpersonal relations) という。学級内の対人関係としては、

教師と児童との関係、児童同士の関係がある。学級内の対人関係は、それぞれの児童の行動を決める。それはまた、学級の雰囲気や、授業にも影響することがある。そのため、学級内の対人関係は、重要な問題である。

学級内の対人関係を調べるには、ソシオメトリックテスト (sociometric test) を使う方法があり、これによって教師は学級内の結合的關係 (良好な関係の維持を希望する関係) や対立的関係 (敵対する関係) を把握できる。

小学校低学年では、友達を選ぶ理由として、家が近い、通学路が同じ、教室での座席がとなりどうし、班が同じといった理由が多いようだ。しかし高学年になると、尊敬できるといった心理的な要因が理由としてでてくる。

対人関係の把握は先にも述べたように、普段の学校生活において、教師にとっても児童にとっても最も重要な事項の一つであるといえる。

## 5、現代社会と集団

現在の社会では、個性化・個別化が進む中で各個人が多種多様な価値観をもったように、社会に存在する多くの各集団も様々な特徴をもっている。

人間には「所属の欲求」というものがある。そしてまた、生まれたときすでに「家族」という集団の一員であるように、人間は人間らしく生きようとするならば、集団に所属することなしに生きていくことは不可能である。しかし先にも述べたように、現代は各自の価値観が多様化しているために、他者との協調ということができにくくなっているのではないだろうか。また、個人が集団と協調していくことが困難になってきていると同時に、その集団のもつ特徴によって、集団が個人から離れていってしまったのではないだろうか。個人と集団との関係は、現代社会に生きる以上、断ち切ることのできない関係である。教育の役割は、児童の個性の伸長と同時に社会性を養うことでもあるのだから、個性化重視の教育はそれ自体悪いことではないが、方法を間違えるといわゆる「木を見て森を見ず」の状態になってしまう。

## 6、現代の集団における音楽

かつて子供たちは、家庭だけでなく地域やその周辺などの人々の中で育てられていた。地域共同体に根ざした大人たち、あるいは年長者・年少者との結びつきの中で成長していた。しかし、高度経済成長がもたらした急速な変化によって地域は姿を変え、家庭では核家族化が進み、子供を取りまく環境は現代でも急速に変化し続けている。かつてのものとは大きく異なる人間関係の希薄化は、いじめや不登校のような問題を生み出しており、教師には、様々な問題を抱えた子供たちにどのように対するべきかというはっきりとした答えはまだない。

現代、さまざまな心理学に関する本が出版されたり、あるいはアロマセラピー（芳香療法）のように「癒す」という行為が一般的に流行しているのは、人間関係が複雑な『ストレスの時代』（注5）である現代に生きる人々が、その心の安らぎを求めているからなのであろう。そして音楽もまた「音楽療法」のようにその果たせる効果を期待されている。

岡本啓氏は、音楽の持つ以下のような機能・性格が、音楽療法の治療効果を発揮させるとしている。（注6）

言語によらないコミュニケーション（ノン・バーバルコミュニケーション）としての機能・・・音楽は、言葉では十分に伝えることができないような複雑な感情や情緒を相手に伝えることができる。自己表現が苦手な防衛心の強い現代の子供たちに にとって、この機能は、子供たちに警戒心や恐怖心を抱かせることなく、友情の輪を広げることが可能となると同時に、教師と児童・生徒との間の信頼関係の確立にも 有効であろう。

音楽がもつ「適応の豊富さ」・・・音楽は、個人にも集団にも、大人でも子供でも、少年にも少女にも、同じように効果的に用いられる。また音楽は様々な活動と 適応し、活動の中心となり、他の活動の背景ともなり得る。こうした性格は、生涯 教育としての音楽教育の可能性や、カリキュラムの統合や融合への音楽の活用の可能性を示すものである。

「孤独感からの解放」・・・音楽は人間の情緒に直接働きかけ、悲しみをそっと 慰め、喜びを一層引き立たせてくれる。音楽を演奏した

り鑑賞したりすることで人 間の心は満たされ、少なくとも、音楽活動がなされている間は孤独感が追放される。現代の若者たちの心は、疎外感にさいなまれている。そんな時音楽は、若者たちの心に優しく働きかけ、気分を転換させ、心の苦痛を忘れさせる助けとさえなるのである。

音楽が「親密感」を生み出す・・・音楽は、人を脅かすことなく安心感を与える。愛情の表現としての音楽は、教師と子供とのコミュニケーションに、最も効果的な手段となる。音楽によって築き上げられた教師と子供との一体感、確かで揺るぎないものであろう。また、子供たちが、互いに歌ったり演奏したりすることによって、子供同士の親密感が生まれ、それが仲間意識や連帯感へと発展すると予想される。

「演奏による満足感と達成感」・・・音楽活動は、人間が失いつつある実体感を呼び起こし、個人と集団に満足感を与える。それどころか、「楽器の演奏ができた」とか、「一つの曲目を完成させた」とかいう達成感、人間の生き甲斐にも通じる貴重な体験なのである。

これらのうちの 、 、 の性質は特に、集団のなかでの子供たちにとって有効なものとして挙げることができるだろう。

## 第2節 学校教育における集団

### 1、学校における集団

学校という場所は、学校教育としての場以外にも、地域の人々の活動の場であったり、社会教育の場であったりするため、児童や教師以外にも多くの人々が集まる。人が集まってできるのが集団であるのだから、学校は多くの集団が存在する場所である。

その中で特に学校教育の場としての学校ということ考えると、そこには教育の主体となる児童が多く存在し、児童の集団が存在する。学校は児童を学習活動にかかわらず、学校生活のほとんどを集団を基盤として行動するようにさせる。学校における主な児童の集団はさまざまであるが、それらの集団は以下のように分けられると考えられる。

(1) 内的条件による集団

仲の良いもの同士、気の合う友達同士が集まってできるグループや互いに信頼しあっている仲間のように、自らの欲求によってできる集団

(2) 外的条件による集団

目的・活動の違いによる集団：クラブや委員会などのように目的・活動によって集まっている集団

生理的・身体的条件による集団：性別や生年月日で分けられる男女別、学年のような身体的条件の違いによって集まっている集団

社会的条件による集団：住んでいる地区などで分けられる登下校の集団のような、児童の社会的条件によって集まっている集団

便宜上の集団：学級、班のように学校教育を円滑に行うために集団の構成人数などで便宜上集まっている集団

例えば、音楽の授業で教師が児童に「好きなように集まりなさい」と言って集まった集団は、(1)の集団であり、「4人で好きなように集まりなさい」と言った場合は、(1)の要素が加わってできた集団といえる。

音楽の授業によく見られる集団は主にこの2種類であると思われる。

2、集団凝集性

教室に限らず、児童の集団は一度できるとそのメンバーは、そう頻繁には変化しない。また、一度できたグループは目的や活動内容が変わっても、例えば係り活動の内容が変わっても、同じようなメンバーで構成されたグループができていることが多い。このような集団で働いている「集団凝集性 (group cohesiveness)」とよばれる性質は、集団内コミュニケーション、社会的影響、態度変化などとも関連づけて研究されてきた。集団凝集性とは、集団のメンバーにその集団にとどまるように作用する心理学的力の総量のこと(注7)である。操作的定義としては集団への魅力が用いられることが多い。集団凝集性を高める条件として、

- ・集団がメンバーの欲求を満足させること
- ・集団内でのメンバーの地位が保証されていること

・メンバーがお互いに似ていること

・集団の社会的評価が高いこと

などがある。

この集団凝集性が集団の生産性を高めるかどうかはまだわかっていないが、明らかになれば、児童に対する教師の接し方も変わり、授業の方法も変わるのではないだろうか。

また上の条件によれば、音楽の授業で例えば演奏の発表をしたグループの場合、ほめることで集団凝固性は促進されると考えられる。集団凝集性が強くなった集団の場合、児童がわざわざ分かれてほかの子とやってみようと思わなくなると考えられるため、感性や考え方が乏しくなるおそれもあると考えられる。

3、集団を構成する人数について

教師は児童に活動の指示を出すとき、同時に「他の人と相談しないで、一人でやりなさい」あるいは「班で協力してやりなさい」というように活動を行う人数を指示するときにしばしばある。人は何かをするとき、それが一人の場合と、二人の場合、三人の場合、四人以上の少人数の場合、大人数の場合ではそれぞれ行動や考え方は全く同じではない。一人の場合は考え、決定し、行動することはすべて自分で行き、不満足な結果になったとしても責任は自分の元にある。二人の場合はお互いに共同して活動し、意見が異なる場合でも、一対一の関係で力関係は同じであると考えられる。しかし三人の場合、三人ともに協力できればよいが、対立した場合、力関係は一方に傾き、一方は不満足に終わるときもある。(次ページ図参照)人数がそれ以上になれば人間関係はより複雑になる。また、自己の存在意義は人数の多さによって薄められ、自分以外の誰かが決定した事項に従うだけになることもあるだろう。

児童の場合、大人に比べ協調性が乏しかったり、逆に周囲に流されやすかったりし、周囲の人間と協力して活動する時には、問題が起きることが多くある。教師はただ、指導に適しているからというだけでグループを形成させるのではなく、このような児童の特性を考え、活動に合った集団の形を考えて児童に指示しなければならない。

【二人集団<対 (pair) または ダイアド (dyad)>】

つりあっている

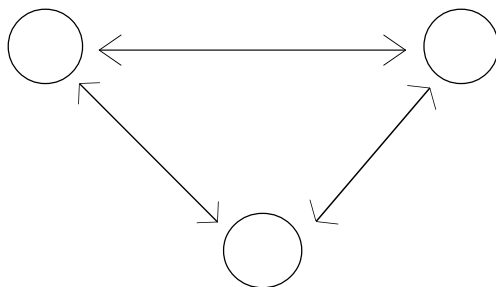


【三人集団 (triad)】

第3者



協調



均衡のくずれ



(語句参考) 田中熊次郎:「新訂 児童集団心理学」 1975 明治図書 p 21

#### 4、児童期と集団

準拠集団 (reference group) は子供が成長・発達するにつれて変化する。

準拠集団とは、「個人が自分自身を関連づけることによって、自分の判断や態度の形成および変容に影響を受ける集団」(注8)のことである。

準拠集団は、幼児期まではほとんどの子供は家族である。それが次第に友人集団に移行する。児童期では生活の一部は家族に準拠し、一部は友人集団に準拠する。その友人集団も男女で変わる。それは保育園や幼稚園では男女関係なく遊んでいるが、小学校に入って学年があがるにつれて、それぞれ同性の友達と遊ぶようになることを考えればわかる。つまり、男子は男子の集団、女子は女子の集団がそれぞれの準拠集団になる。

自分たちの友達や仲間を準拠集団とすることは、両親などへの依存を断ち切って自立し始めたと考えられる。

#### 5、帰属意識 (class identification ; organization identification)

帰属意識とは、ある集団の成員が、単に形の上でそれに所属しているだけでなく、生活感情の上でもその集団を自分の集団、自分の生活根拠と感じている度合である。(注9)

例えば学級という集団の場合を考える。児童生徒は年度始めにいやおうなしに、いわば強制的に編成された学級に配属される。そのため、学級編成のはじめは、児童の学級に対する帰属意識は薄い。しかし、教師の働きかけによって班長が選ばれたり、各自が役割分担をするようになり、全体の組織化がすすむ。また、運動会や文化祭などの学校行事に学級として参加することから集団の凝集性が高まり、児童の学級への帰属意識が高まってくる。

学校で児童が帰属意識をもつ集団は学級に限らないことはいうまでもない。それは所属するクラブであったり、教師に反発するグループであったりする。

#### 6、授業における集団

学校教育の根幹をしめる学習活動の主は授業である。普通、学級単位で行う授業の中で見られる集団の性格も学校全体を見た中での集団と同様に、どのような児童がどのくらい、どのように集まったかによってさまざまである。

授業でつくられる集団は、休み時間や昼休みに遊んだり一緒に行動したりするような自然発生的な集団ではなく、また児童からすれば、いつもの仲の良い友達同士でグループになれるわけではなく、特に仲の悪い子がグループの中に入ったり、仲の良い子と違うグループになったりすることもある。教師も児童の望むようにいつも集団を形成させるわけではない。それは集団を形成することで、集団の中で児童が相互に影響しあい、より豊かな人間になってほしいと教育的効果を望むからでもあるからだろう。

#### 7、集団と授業

では、人間同士の関係を否応にもつくりだしてしまう集団は、子供たちに一人であるときとどのように異なる感情をもたらすのであろうか。

通常、授業は講義形式で行われることが多いが、そこに見られる関係は、教師対児童の一对多数である。しかしそのような授業の中でも、さまざまな形の集団が内包されている。児童に考えさせたり調べさせるとき、多くの教師は児童をグループに分けるだろう。音楽の授業も、ほとんどが児童主体で活動することが多い。児童だけで活動することで、児童を椅子に座らせて授業を受けさせているときよりも、教師の眼は行き届きにくくなる。そして児童は自由であるぶん、受け身的で楽な状態にはなりにくい。今の子供たちは集団で授業に参加することでどう感じているのだろうか。

音楽のほかに集団・グループになって授業を行う教科に体育がある。体育の授業で行うスポーツの楽しさの因子は、千駄忠至、森田啓之両氏は「スポーツの楽しさに関する研究」の中で、普遍的因子は「親和」「承認」の因子であるとしている。両氏は、この二つの因子について次のように述べている。

普遍的因子としての「親和」「承認」の抽出は、スポーツの練習や試合場面における指導者

と生徒、生徒間の人間関係や精神的な発達に影響していると考えられる。すなわち、「親和」の因子は、人間関係や信頼関係の良好な状態から得る快感である。(中略)

「承認」の因子は、自分の行動やその結果を他の人に肯定されることによって得る快感である。(注10)

この研究では集団であることによっておこる「親和」、「承認」が楽しくする要素であるとしている。

では音楽の授業においては、集団はどのように児童に作用するのだろうか。

## 第二章 仮説の形成

### 第1節 楽しい音楽の授業

#### 1、音楽教育の目標

音楽は現代にあふれている。そして子供たちもそれに親しんでいる。ただ、音楽が好きでも音楽の授業が嫌いというのでは、音楽が、“心の病”を多かれ少なかれ抱えた現代の子供たちにどれだけ有効であっても、その効果は十分とはいえないのではないだろうか。

音楽科の目標は平成元年の小学校学習指導要領に

**表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性の基礎を培うとともに、音楽を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う。**(注11)

とある。子供たちが日常の大半を過ごす学校の中で、特に音楽の授業において教師が音楽をどのように児童に提供するかによって、この「豊かな情操を養う」という目標は達成できるかできないかわる。言い換えれば教師が音楽の持つ特性を生かし、児童が満足して、あるいは楽しく積極的に授業に参加できるようにしなければ、音楽の長所も十分に子供たちには生かされず、学習指導要領の目標の達成も難しいだろう。

では、児童が「楽しい」と感じ、満足して意欲的に参加できる音楽の授業は、どんな授業なのだろうか。

#### 2、「楽しい」ということ

ここで「楽しい」という感情について考えてみる。Csikszentmihalyiは、ある一つの経験が単に快いだけのものではなく、楽しいものであるかどうかを決定するのは、経験の主體的な諸過程の複雑な相互作用であるとしている。これはつまり、「楽しむ」ということは「快」を感じるより、より積極的な行為であるといえるのではないだろうか。また、「楽しさ」は一つの要因によって決定されないともいえる。

また彼は、活動を楽しむものにするのは、活動をする事そのものだけではなく、活動をする人がその活動をどのように感じ、解釈しているかということであるとしている。

また一般的には、活動における人間の能力と内発的満足とは結びつかない。つまり、演奏技術の未熟な幼児でも音楽を楽しむことができることを考えれば分かるように、音楽の授業での楽しさを考えたとき、表現の技能や技術・能力があればより満足するとは限らない。

これらのことを考慮すれば、児童が楽しいと感じられる授業を教師が行うためには、児童が授業での活動についてどのように感じているのかを、教師が理解する必要が不可欠である。

#### 3、授業での楽しさ

「楽しさ」といってもこの感情はさまざまな面を持っている。見た目にはわかりやすいもの、わかりにくいもの、瞬間的なものや長時間続くものなどがあり、人によっても変化する。では、授業での楽しさとは何だろうか。

授業での楽しさは、学ぶ、理解することの楽しさであろう。「わかった」「できた」という感情は、毎日教えられる立場の児童にとっては大きなものであろう。「わからない」という状態が、人をいやな気分にするのは大人でも子供でも同じである。しかしまた、できない楽しさ(注12)というもある。この楽しさは一見、前述の楽しさと異なっているようであるが、この楽しさは理解することの楽しさの前に存在している。つまり、挑戦する楽しさである。この楽しさは、一度理解する楽しさを経験すると、できないことやわからないことは、わかるようになれば楽しいとわかる。今はそうでなくても

次は楽しいとわかっているなら、そこまでの課程をいやな気持ちだけで過ごす人はいないだろう。単にできないことは、ただ苦しいだけであるということではないという認識も教師には必要ではないだろうか。それでも、児童が今どのような心理状態であるのか、教師が正しく理解する必要があることは忘れてはいけない。

これらの二つの楽しさと似ているが、ほかに探求する楽しさと発見する楽しさがある。これらの前述のもの異なる点は、前述のものは既に存在し認められているものが主であるという点である。

「発見学習」という授業方法があるように、児童が自主的に行動し、またその行動によって何かを得たり身につけたりすることは、児童の自主性や積極性をのばし、学習効果を上げるだけでなく、児童にとっても楽しいと感じさせることができるのである。

### 3、楽しい音楽の授業

音楽の授業の楽しさは、他教科と共通する前述のような楽しさもあるが、いわゆる必須の勉強と見られない原因であろうと思われる、学ぶという活動は少ないように見える。本来、音楽も学ぶ対象としては十分な教科であるのだが、感覚によるところも多く占められるため、国語や算数などの主要5教科に比べれば学習しているという行為が少ないように感じる。しかし楽しいと感じるのは、「わかる」楽しさだけではない。また、「できる」という楽しさも存在する。ほかにも音楽ならではの楽しさがある。歌を歌ったり、楽器を演奏したりという個人でも楽しむことのできる活動があれば、集団で楽しむことのできる活動もあると考えられるだろう。またそれらの楽しさの原因は、一つ一つが独立しているわけではなく、相互に関係しあって「楽しさ」を構成していると考えられる。

解放の因子  
理解の因子  
歌うことの因子  
習慣性の因子  
楽器演奏の因子  
鑑賞の因子  
依存の因子

### 創造の因子

中村めぐみ氏は「楽しい音楽の授業を目指す指導の研究」で、音楽の授業を楽しくする因子は以上のように示している。(注13)

ここでは、人間関係・環境などに関する要素は抽出されていないが、ここで示された音楽の授業を楽しくするための八つの因子の中で、特に人間関係に関するであろうと考えられるものは、“解放の因子”“理解の因子”“依存の因子”である。

この三つの因子を人間関係という視点から解釈すると、“解放の因子”は、人間関係によって起こる疎外感や圧迫感のような束縛から子供たちの心が解放されることによって、音楽の授業が楽しいと感じることができていることを示している。“理解の因子”は、教師と児童、また児童同士でお互いに認めあい理解しあうことが、楽しい音楽の授業につながるということであり、そして“依存の因子”は、他者に依存したり頼ることで自分の意志によらずに学習が自動的に進められるので、子供たちにとって精神的に楽な状態になり、そういうとき、楽しいと感じられるということであろう。

このようなことを考えれば、授業での集団は教師によって意図的に形成されたものが多く、その集団自体は必ずしも児童にいい感情ばかりをを与えないと考えられたとしても、体育の研究で集団による楽しさの因子があったように、音楽の授業にも集団によってもたらされる楽しさがあると考えられる。

### 4、音楽の授業における集団

前に学校での集団を分類したが、音楽の授業における集団は、主に次のように分けられると考えられる。

集団を構成している人数によって  
集団を構成している人によって  
集団の目的・役割によって

例えば、学級で二部合唱をする場合、はその学級の人数、はすべて児童、はパートの数は二つ、ということになる。

集団の構成条件が一つでも変われば、集団の性質は変わると考えられ、その集団に対する教師の指導や教師の態度も変えなければならない



と考えられる。ここでも例をひくと、ある活動をするにしても、学級の児童の数が誰かが欠席して偶数の場合、先生がそこに加わるか加わらないかによって人数による力の関係は変化する。学級では、多数決が児童の意見が分かれた場合、よくつかわれたりする。たった一人であっても、集団で対立していた場合一人は大きな存在である。ましてや、先生は児童にとっていつも何らかの影響を及ぼしており、その存在は小さいとは決していえないだろう。

教師がいる児童の集団と児童だけの集団では、児童の集団に対する感じ方も大きく変わると考えられる。

## 第2節 仮説の形成

今までに集団には相反する性格があることを述べた。集団でいることで不快感を感じたり、苦痛を感じるものがあれば、逆に集団でいることによって楽しいと感じられることもある。果たして、音楽の授業ではこの集団のもつどちらの性格がより強く現れるのであろうか。また、集団によって音楽の授業の楽しさは影響されるのだろうか。影響されるとすれば、集団が変化することによってどのように変化するのだろうか。音楽の授業にはさまざまな活動があるため、その活動によって集団のもつ性格も変わると考えられる。

集団はその成員によって性格が変わる。そこで音楽の授業の中で見られる、異なる集団を六種類設定し、それらと比較するために一人という人数の形態も設定した。これ以降、「一人」の項目を加えた七種類の人間の集合形態を『集団』と呼ぶことにする。

また、男女および学年の違いによっても集団との関わり方や『集団』に対する感じ方が異なると考えた。そこで、次のような仮説をたてた。

第1仮説 活動に適した『集団』形態が存在する。

第2仮説 性差・学年差によって児童が楽しいと感じる『集団』形態は異なる。

## 第三章 調査

### 第1節 調査

#### 1、調査の目的

集団でいることによって苦痛を感じるものがあれば、快感情を感じることもある。

児童は音楽の授業の中で、どのような『集団』のときにどのような活動を行えば、児童は楽しいと感じるのか。また、音楽の授業におけるさまざまな活動は、どのような『集団』構成によって生かされるのか。特に、授業の中に存在するさまざまな『集団』によってどのように楽しさが変化するのか、ということ明らかにして、音楽の授業を楽しくするための『集団』形態や人間関係を考えたい。

#### 2、調査の仮説

##### 第1仮説

活動に適した『集団』形態が存在する。

##### 第2仮説

性差・学年差によって児童が楽しいと感じる『集団』形態は異なる。

#### 3、調査の方法

##### (1) 調査対象

兵庫県加古川市立平岡小学校

4年生1組	36名(男子22名、女子14名)
2組	36名(男子21名、女子15名)
3組	38名(男子22名、女子16名)
5年生1組	31名(男子14名、女子17名)
2組	33名(男子14名、女子19名)
3組	34名(男子15名、女子19名)
4組	31名(男子11名、女子20名)
6年生1組	37名(男子19名、女子18名)
2組	38名(男子18名、女子20名)
3組	37名(男子21名、女子16名)

兵庫県三木市立緑が丘小学校

2年生2組	24名(男子16名、女子8名)
4年生1組	36名(男子19名、女子17名)

鈴木ゼミ研究紀要第8号

兵庫県神戸市立井吹東小学校

4年生2組 37名(男子19名、女子18名)

島根県境港市立境小学校

3年生竹組 39名(男子21名、女子18名)

4年生梅組 37名(男子18名、女子19名)

5年生梅組 29名(男子16名、女子13名)

計553名(男子286名、女子267名)

(2) 調査期間

1997年11月26日～12月12日

(3) 調査方法

音楽の授業の中で見られる子どもの音楽的活動と、また音楽の授業の中で見られると考えられる『集団』形態を分類し、それをもとに35個の調査項目を設定した。調査は質問紙形式で行い、回答方法は5段階評定法を用いた。

(4) 質問紙の回収状況

有効回答率 98.9%

(有効回答部数 553部/

回答部数 559部)

次ページにアンケートを掲載する。

今から、音楽の時間についていくつか聞きますので、教えてください。

これはテストではないので、正しい答えやまちがった答えはありません。

自分の思ったとおりに教えてください。

音楽の時間に、こんなことがあると、あなたはどのくらい楽しいと思いますか。

( )年 ( )組 ( 男 女 )

自分の気持ちと同じだと思うところに、

ひとつだけ をつけてください。

たとえば、

新しい曲を聞くこと

では、はじめましょう。

	と て も 楽 し い と 思 う な ら	ま あ ま あ 楽 し い と 思 う な ら	ど ち ら で も な い と 思 う な ら	あ ま り 楽 し く な い と 思 う な ら	ぜ ん ぜ ん 楽 し く な い と 思 う な ら
	5	4	3	2	1
1 ひとりで曲を聞くこと	5	4	3	2	1
2 ひとりで歌うこと	5	4	3	2	1
3 ひとりで楽器をえんそうすること	5	4	3	2	1
4 ひとりで曲をつくること	5	4	3	2	1
5 ひとりで楽しむの勉強をすること	5	4	3	2	1
6 友だちとふたりで曲を聞くこと	5	4	3	2	1
7 友だちとふたりで歌うこと	5	4	3	2	1
8 友だちとふたりで楽器をえんそうすること	5	4	3	2	1
9 友だちとふたりで曲をつくること	5	4	3	2	1
10 友だちとふたりで楽しむの勉強をすること	5	4	3	2	1
11 3、4人のグループで曲を聞くこと	5	4	3	2	1
12 3、4人のグループで歌うこと	5	4	3	2	1
13 3、4人のグループで楽器をえんそうすること	5	4	3	2	1
14 3、4人のグループで曲をつくること	5	4	3	2	1
15 3、4人のグループで楽しむの勉強をすること	5	4	3	2	1

うらもあります。



## 第2節 調査の結果と考察

## 【分析方法】

「とても楽しい」に5点、「まあまあ楽しい」に4点、「ふつう」に3点、「あまり楽しくない」に2点、「全然楽しくない」に1点を与え、集計した後右のような分析を行った。

## 【分析結果とその考察】

集計結果をもとに、一人当たりの平均を算出した。下の表は、「一人」「二人」「グループ」「みんな」「先生と二人」「先生とグループ」「先生とみんな」の、七種類の「集団」ごとに各活動の点数を集計し、一人当たりの平均を出したものである。

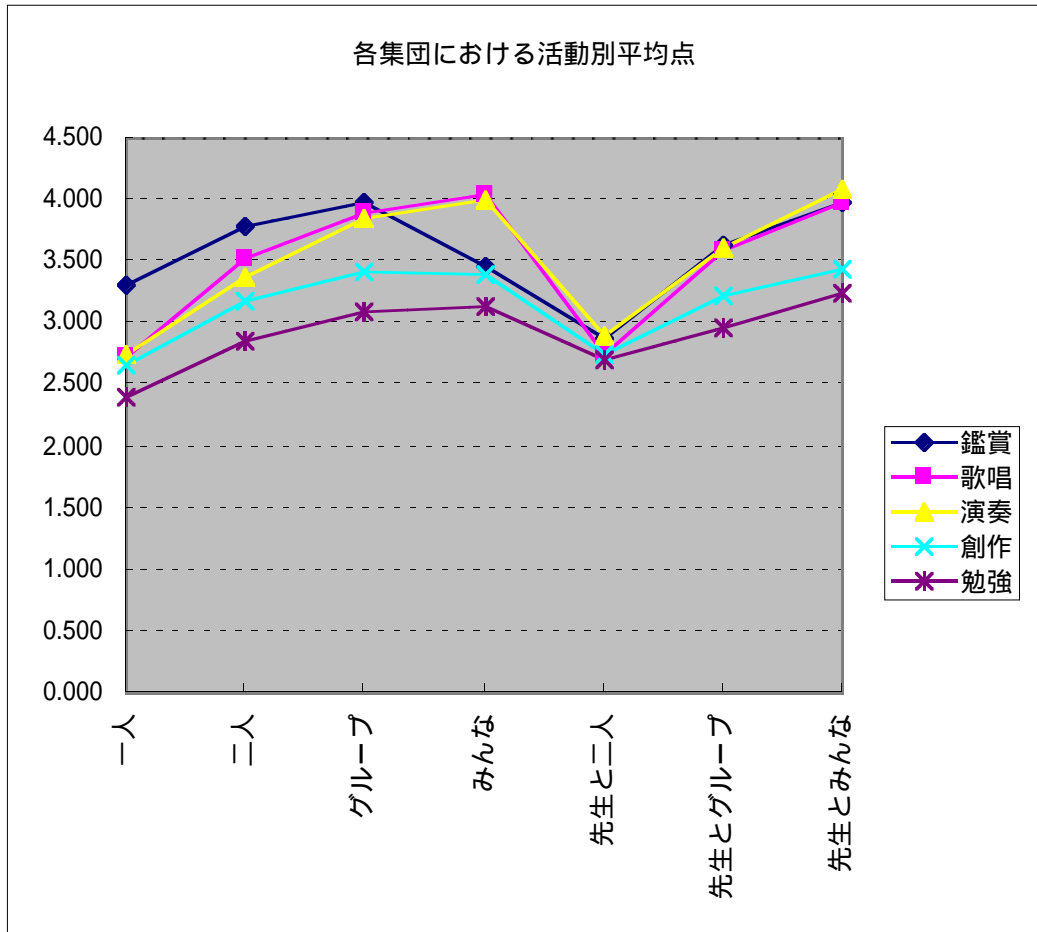
## &lt;合計&gt;

	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	1836	2092	2200	2186	1586	2012	2207
歌唱	1507	1954	2150	2237	1517	1984	2201
演奏	1518	1871	2127	2216	1599	1994	2260
創作	1467	1757	1885	1879	1525	1784	1898
勉強	1330	1583	1715	1734	1495	1683	1798
合計点	7658	9257	10077	10252	7722	9457	10364

## &lt;平均&gt;

	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	3.320	3.783	3.978	3.453	2.868	3.638	3.991
歌唱	2.725	3.533	3.888	4.045	2.743	3.588	3.980
演奏	2.745	3.383	3.846	4.007	2.892	3.606	4.087
創作	2.653	3.177	3.409	3.399	2.758	3.226	3.432
勉強	2.405	2.863	3.101	3.136	2.703	2.962	3.251
合計平均	13.667	16.740	18.222	18.539	13.964	17.101	18.741

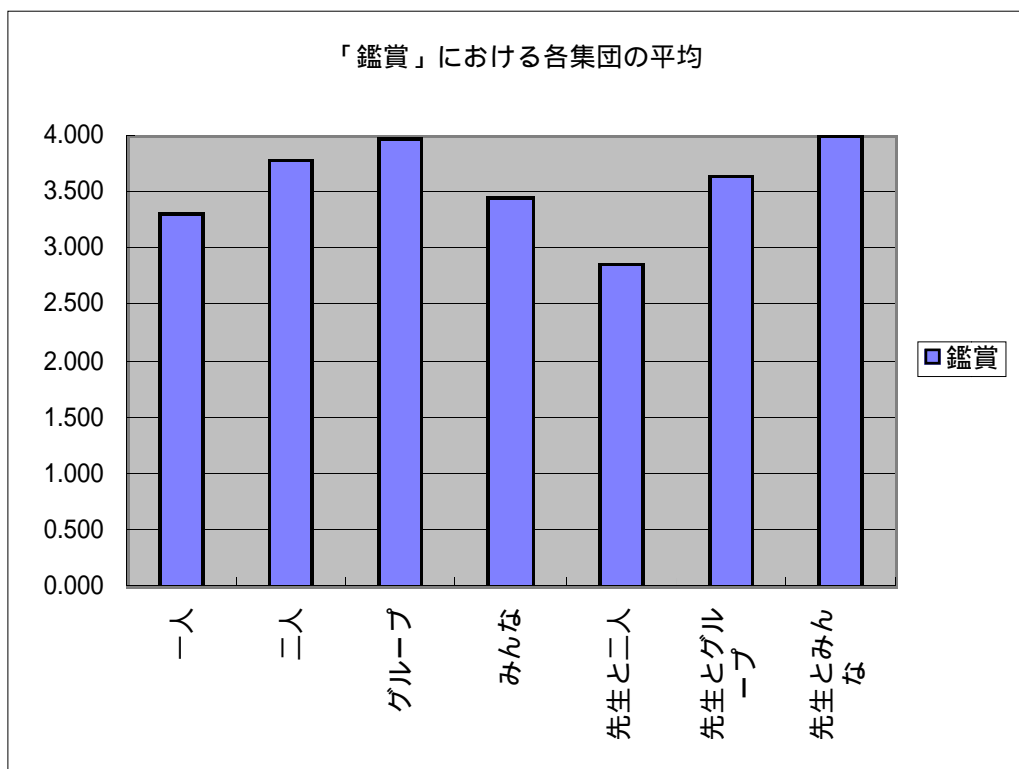
1、全体について



上のグラフを見てわかるように、どの活動においても『集団』形態によって楽しさが異なっており、「先生と二人」の『集団』は、平均を下回っている。これは、ほとんどの児童が「先生と二人」でいることは楽しくないと感じているということである。

以下、質問項目における「曲を聞くこと」を「鑑賞」、「歌を歌うこと」を「歌唱」、「楽器の演奏をすること」を「演奏」、「曲をつくること」を「創作」、「楽しむの勉強をすること」を「勉強」として各活動における結果に考察を加える。

2、各活動について  
 (1)「鑑賞」について

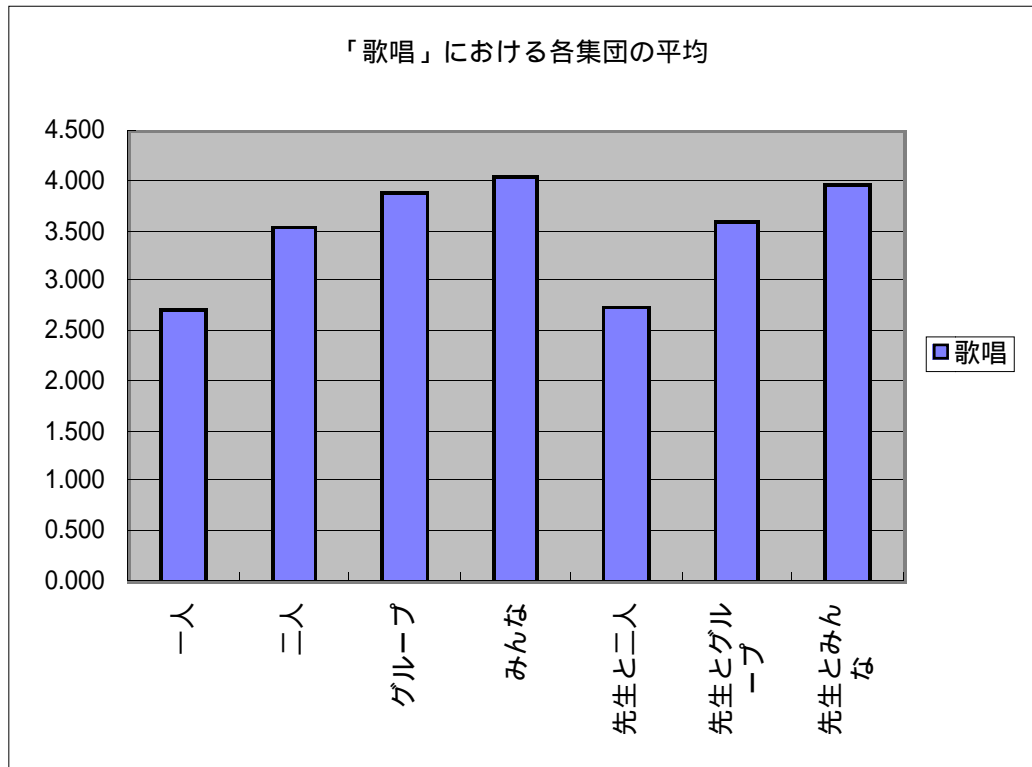


上のグラフからも分かるように、「先生と二人」の形態以外は、どのような『集団』形態でもすべて「ふつう」より楽しい、といえる。特に、「先生とみんな」、「グループ」、「みんな」で鑑賞活動を行うことが楽しいといえる。

「先生と二人」の場合、先生がそばにいるという状況が、児童に圧迫感や緊張感をもたらし、楽しくないという感情を生み出させていると考えられる。そのような張りつめた状況は同時に、児童を彼らにとって楽しくない、おもしろくない、状況におくということである。

教師と一緒にいるという同じ状況でも、「先生とグループ」「先生とみんな」の場合の方が、「先生と二人」よりもより楽しいと思うのは、緊張感や圧迫感があっても、自分と同じような状況にある友達や仲間が共にいることで、その束縛感が緩和されるためであろうと考えられる。

(2)「歌唱」について



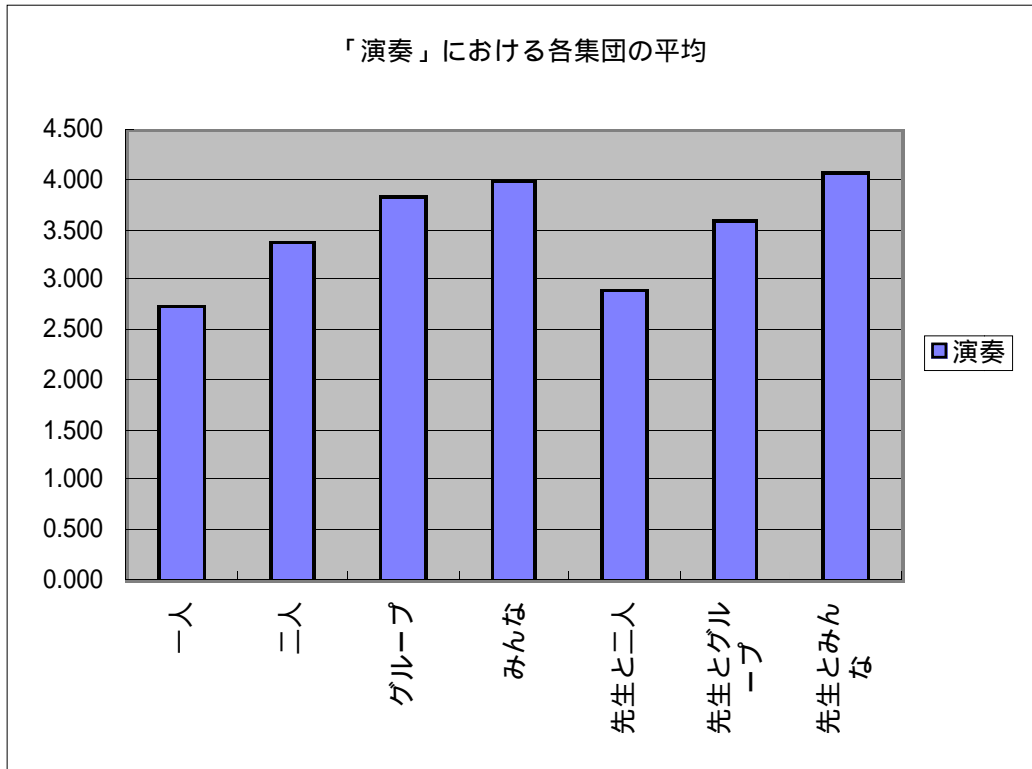
七種類の『集団』形態のうち、特に点の低かったのは、「一人」と「先生と二人」であり、また特に点の高かったのは「みんな」「先生とみんな」である。

「先生と二人」という状況は鑑賞活動と同様な理由であると考えられる。「一人」で歌う場合、音楽の授業においては聞き手が存在する。歌がうまく歌えるか、失敗した場合どうしようという自分の歌唱に対する不安感と、自分の歌が聞き手にどう思われるかという評価に対する不安感に加えて、一人であることの孤独感が楽しくないという感情を児童にもたらすと考えられる。

「みんな」、「先生とみんな」で歌うことは、「歌う」という親しみやすく楽器の演奏に比べ比較的簡単に生活に根付いた音楽的行為を、学校生活という共に共有している時間の中で特に示し合わせて行うことで、普段よりもさらに一体感や連帯感をもたらすために児童に楽しいと感じさせると考えられる。



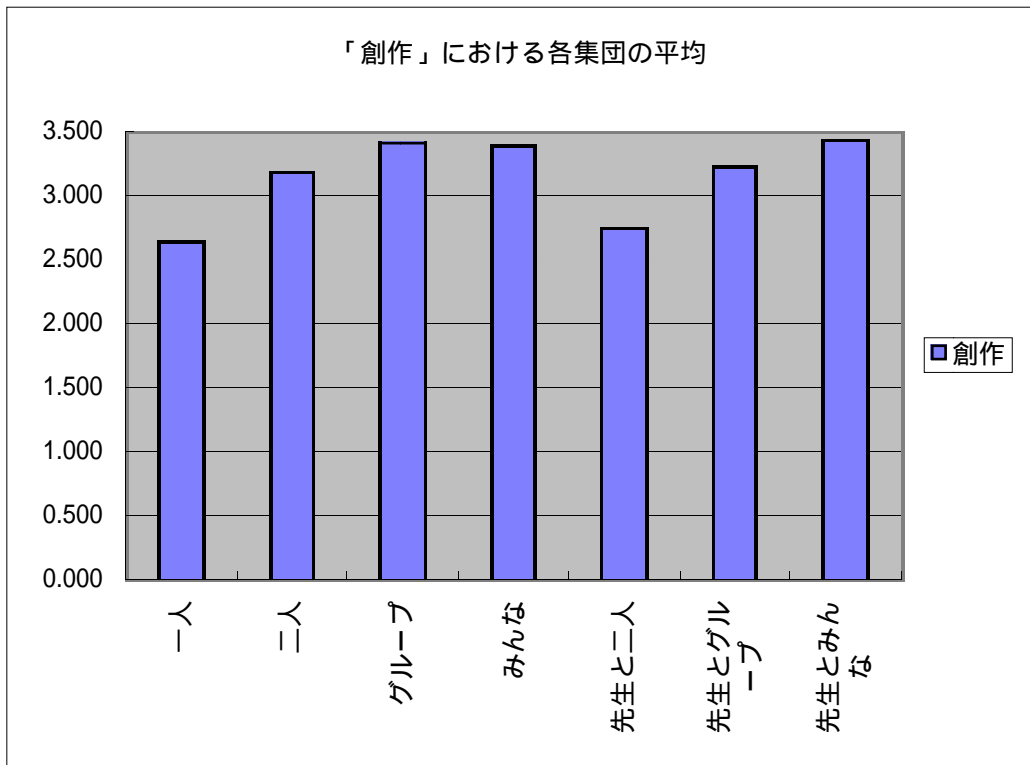
## (3)「演奏」について



「歌唱」同様、七種類の『集団』形態のうちで特に点の低かったのは、「一人」と「先生と二人」であり、また特に点の高かったのは「みんな」「先生とみんな」であった。「一人」と「先生と二人」が点が低かった理由および、「みんな」「先生とみんな」が他よりも点が高かった理由は、「歌唱」と同様であろう。

多人数で演奏することが楽しいと感じられるのは、一体感や連帯感が得られるためであり、またそれぞれがパートに分かれて演奏する場合、自分や自分たちのパートの役割を果たすことで演奏がうまくできるという自己の存在感を感じることができ、自己実現を果たすことができるためであろう。

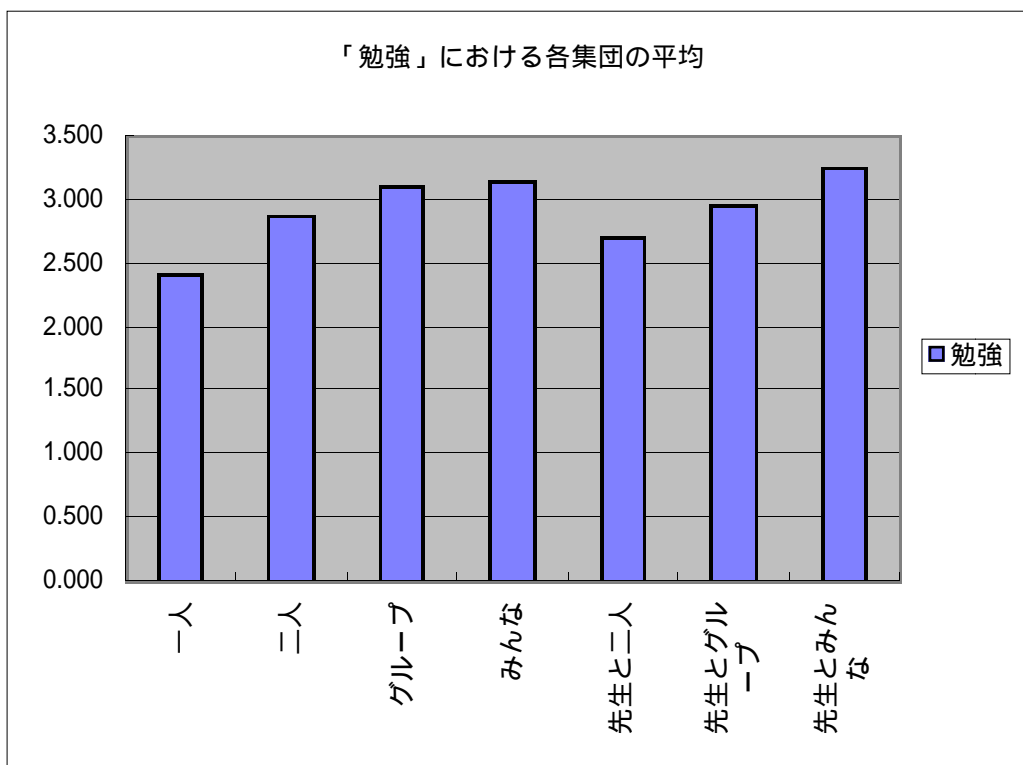
(4)「創作」について



4点をこえる高い点の『集団』は見られなかったが、他の活動と同様、「一人」「先生と二人」の点は低かった。なかでも「一人」は全活動、全『集団』において最低であった。これは、「一人」で創作するという活動が、他に比べて他人と関わることなく、自己のなかだけで完結してしまう活動であり、また「一人で曲を聞く」

というような受け身で終始するような行為ではなく、表現するという苦しみを伴うために楽しくないと感じさせてしまうのではないだろうか。

## (5)「勉強」について



ここでは、「一人」「二人」「先生と二人」「先生とグループ」の四つの『集団』で低い点であった。また他の『集団』の点も3点前半であり、「勉強」は比較的どのような『集団』においてもふつう、あるいは楽しくないと児童が感じているとわかる。

楽譜の勉強は、小学校においては拍子・調・強弱・音の長さ（音符）などの記号や記譜の形式を勉強することが主である。普段の音楽の授業でこれらを知らなければ、教科書の楽譜を何の助けもなしに読みとることは、記号や形式が

増えてくる高学年になるにつれてより困難になる。しかしMeyerが「音楽的知覚は経験を積んだ聴き手の感受性の強い反応に基づかねばならない」（注14）と学習の重要性を述べているように、音楽を自ら楽しもうとするならば、これらの学習は避けられない。そのため教師は、この活動における楽しい授業を工夫しなければならない。

## 【考察】

以下、全体および各活動ごとの結果をもとに、『集団』による楽しさの違いを考察する。

「先生と二人」が他の『集団』に比べて低かったが、それは先生がそばにいるという状況が、児童に普段とは異なる圧迫感や緊張感を感じさせ、それが楽しいと感じさせないでいると考えられる。授業の中で考えられる状況として、例えば曲の鑑賞を行っているとき、教師が私語や鑑賞以外の別の行動をしている特定の児童のそばに行き、そこにじっとしていたりすることがあるが、教師のそのような行為だけで児童のその行為が止んだり曲を熱心に聞いたりするのは、教師がそばにいるという存在感が児童に教師がいるときとは違う圧迫感や緊張感、あるいは束縛感をもたらしているからであり、児童はこのとき、教師を自分たちの「監視者」「処罰者」として見ていると考えられる。上のような状況は、児童にとって楽しくない、おもしろくない、という状況ということである。

教師と一緒にいるという状況でも、「先生とグループ」「先生とみんな」の場合の方が、「先生と二人」よりもより楽しいと思うのは、緊張感や圧迫感があっても、自分と同じような状況の友達や仲間がいることで、その束縛感が緩和されるためであろうと考えられる。中村めぐみ氏は、「音楽の授業を楽しくするためには、まず何よりも子供たちが、身体的にも精神的にも解放されることが必要である」としているが、教師はたとえ好きな先生でも児童にとっては同じ学級の友達よりも気の置ける存在であり、児童が教師に束縛感や制約感を感じている状況が続く限り、楽しい音楽の授業は成立しない。

次に、低かった「一人」であるが、歌ったり演奏したりという自分を表現するという活動には、その表現に対する受け手が存在する。失敗した場合どうしようという自分に対する自信のなさや不安感と、みんなにどう思われるかという評価に対する不安感に加えて、一人であることの孤独感が加わり、楽しくないと児童は感じてしまうと考えられる。歌でも演奏でも一人で発表させる場合、児童の感情を的確に読みとって不安がったり自信のなさそうな児童には励ましを与え、演奏後は良かったところをほめ、児

童に演奏に対する自信と、音楽に対する興味関心をのばすことができるようなことばがけをすることが必要である。またみんなで行う場合は、全体をみると同時に個人やパートにも適切な注意を払い、全体をまとめる必要がある。

しかし、高学年ほど一人で曲を聞くことが他の学年よりも楽しいと感じているという結果が出たように、曲を聞いたり楽譜の勉強をしたりという、歌ったり演奏することよりも比較的受け身的な活動や、歌うことや演奏することに比べ、曲をつくるというはっきりとわかる結果だけではない活動は、集団の人数によって楽しさはあまり左右されない。

他の『集団』に比べ高かったのは「みんな」「先生とみんな」であった。みんなで全く同じ活動を、「みんなでやる」という意識を持って行うことで、普段よりもさらに仲間意識や同士という気持ちが強まり、一体感や連帯感を感じさせるために、児童が楽しいと思うと考えられる。また、特にパートに分かれる場合、自分の役割を果たすことで全体に成功、あるいは満足感をもたらすということが、自己の存在意義を本人に感じさせることができ、自己実現を図ることができる。しかし、グループに分かれて演奏するときのように、自分のパートが自分だけであったりすると、児童は「一人」のときと同じような不安感を感じることもある。

教師は児童の存在を『集団』の形だけではなく、その児童と置かれている状況から児童が今、どのように感じているのかを判断し、どうすれば児童が楽しく音楽の授業を受けられるようになるかを常に考えて、授業を行わなければならない。

## 【第1仮説の検証】

ここで第1仮説の検証を行う。今まで述べた考察から、児童はそのおかれた状況（『集団』）によって異なった感情を持っていることがわかる。音楽の授業における活動も、さまざまであり、それぞれに性格が異なるため、適している『集団』形態も異なると考えられる。しかし児童のほとんどが楽しいと感じていても、ある児童はおもしろくないと感じることもある。また児童にとっては楽しくても、教師にとっては「ここでは一人でやってほしい」と考えるよう

な、望ましくない『集団』も存在してしまうように、ある活動にはこの『集団』形態、というように絶対的なものはない。

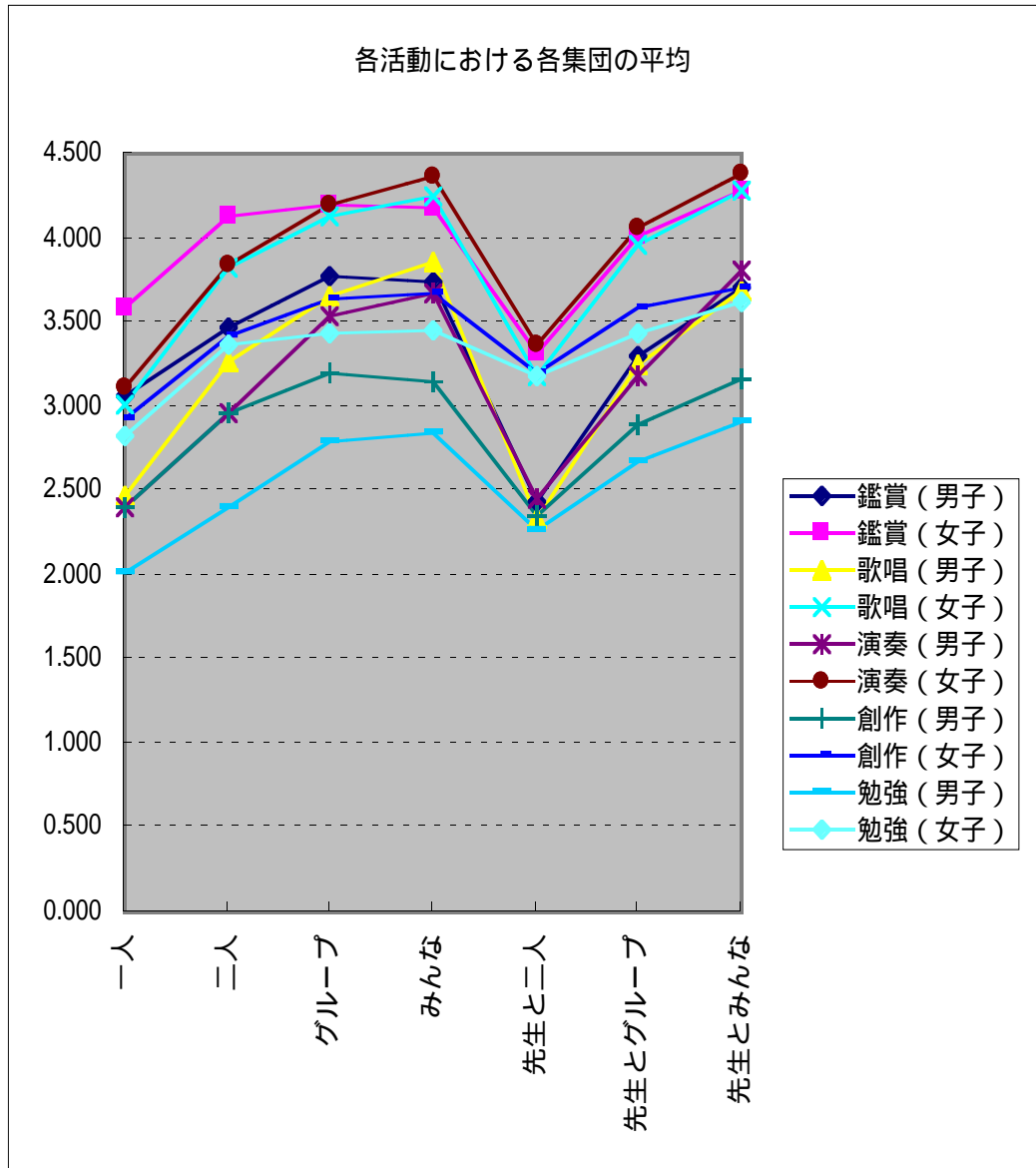
よって第1仮説「活動に適した『集団』形態が存在する」は、ほぼ成立するといえる。

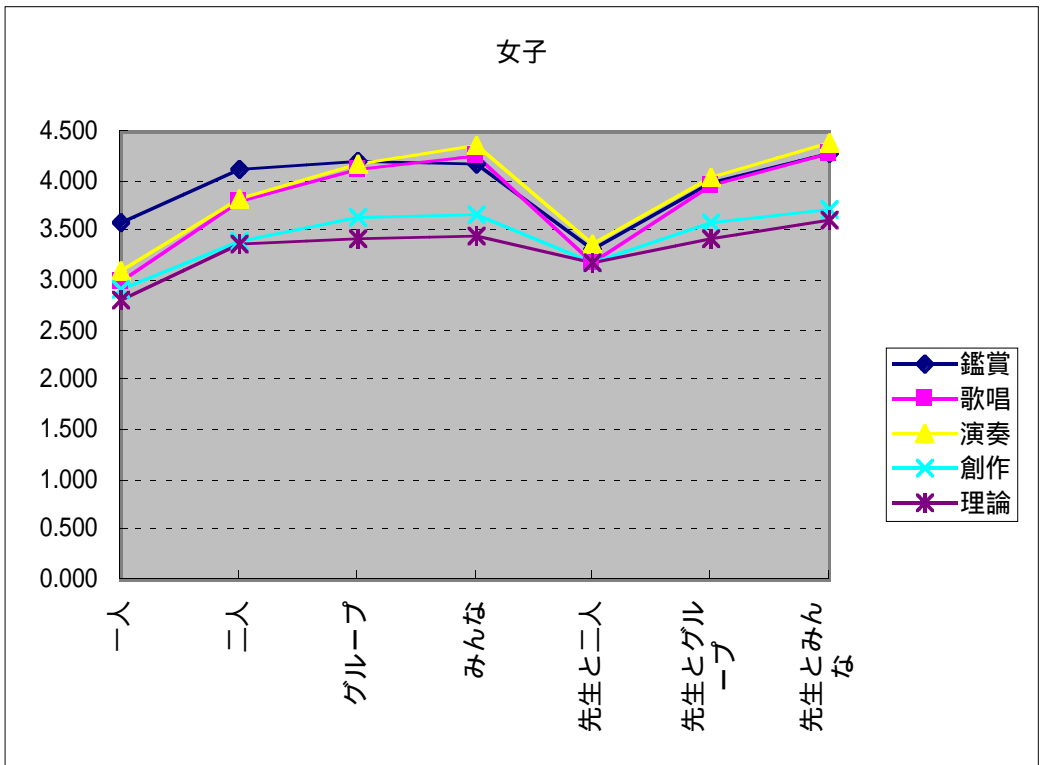
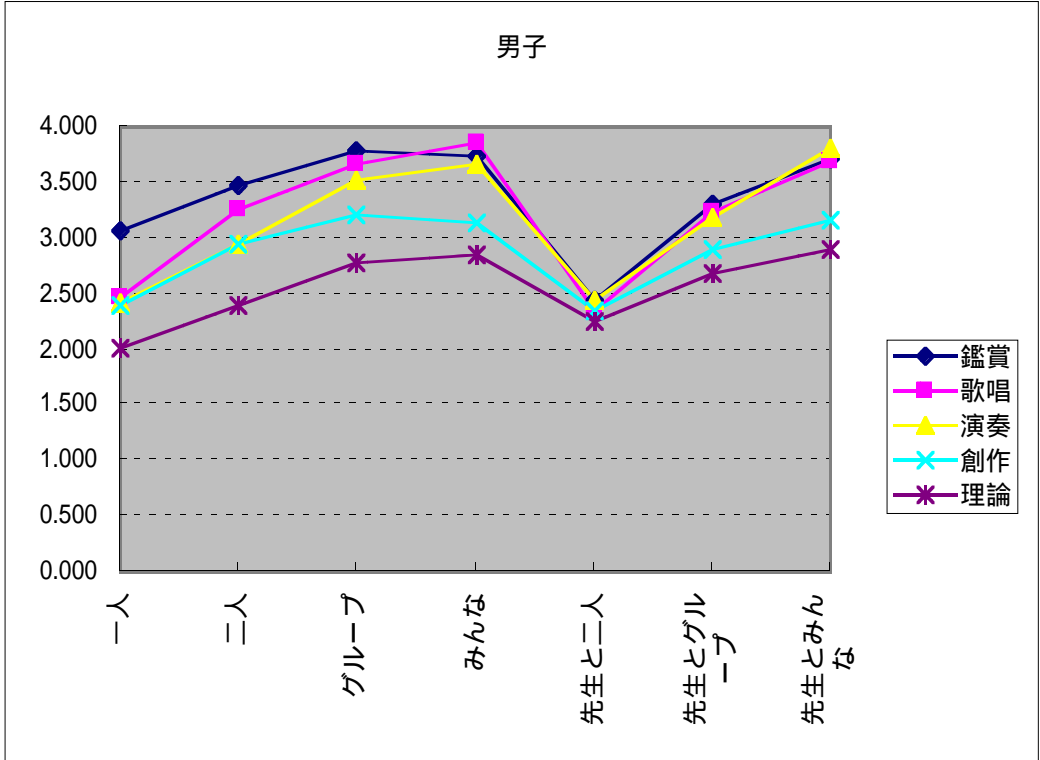
### 3、性差について

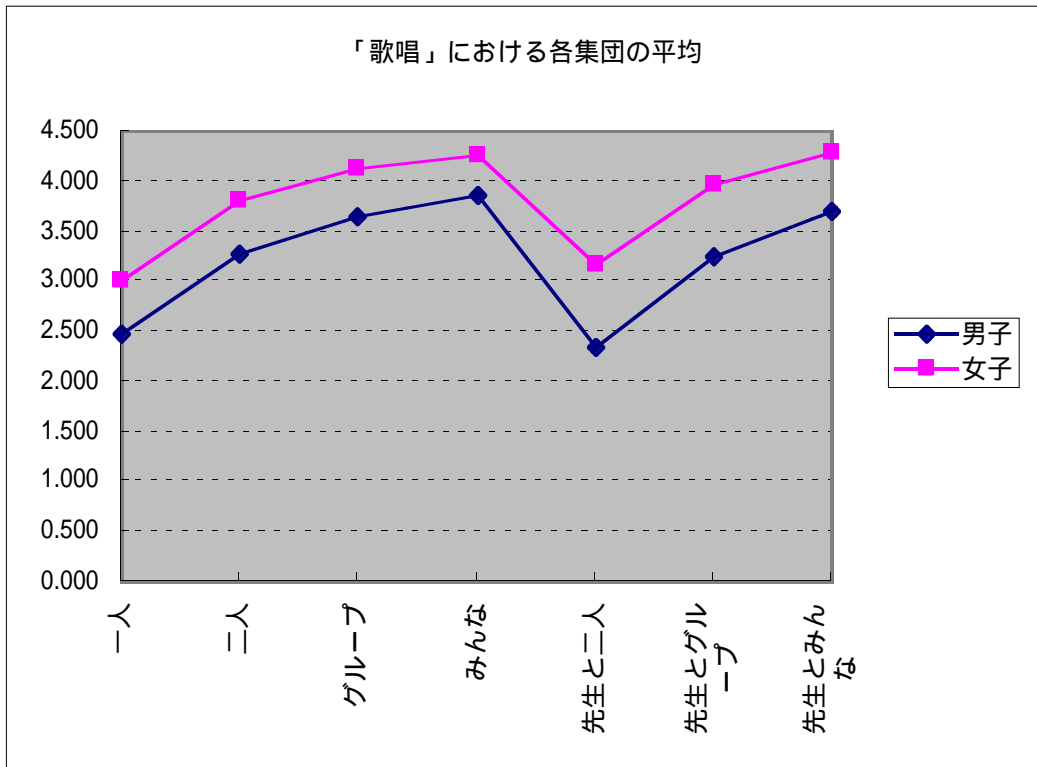
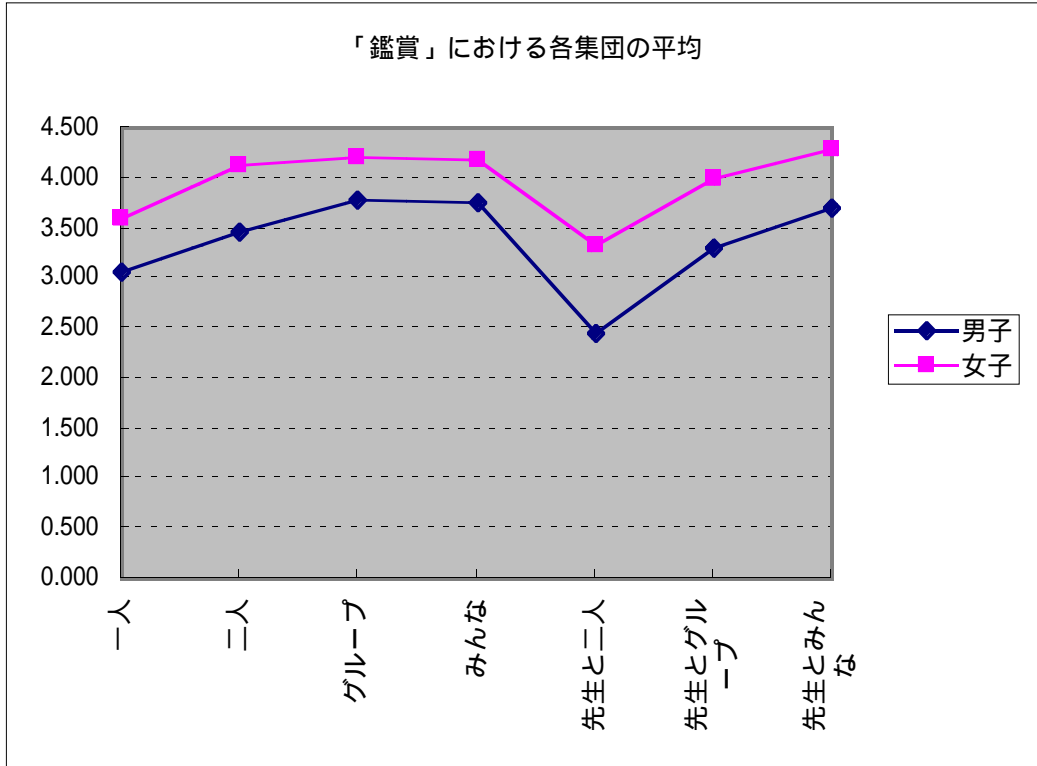
『集団』による楽しさの違いが、男女によってどう異なるかを明らかにするため、男子と女子の調査結果を比較した。結果が左の表である。これによるグラフは以降に掲載する。

< 平均（男女別） >

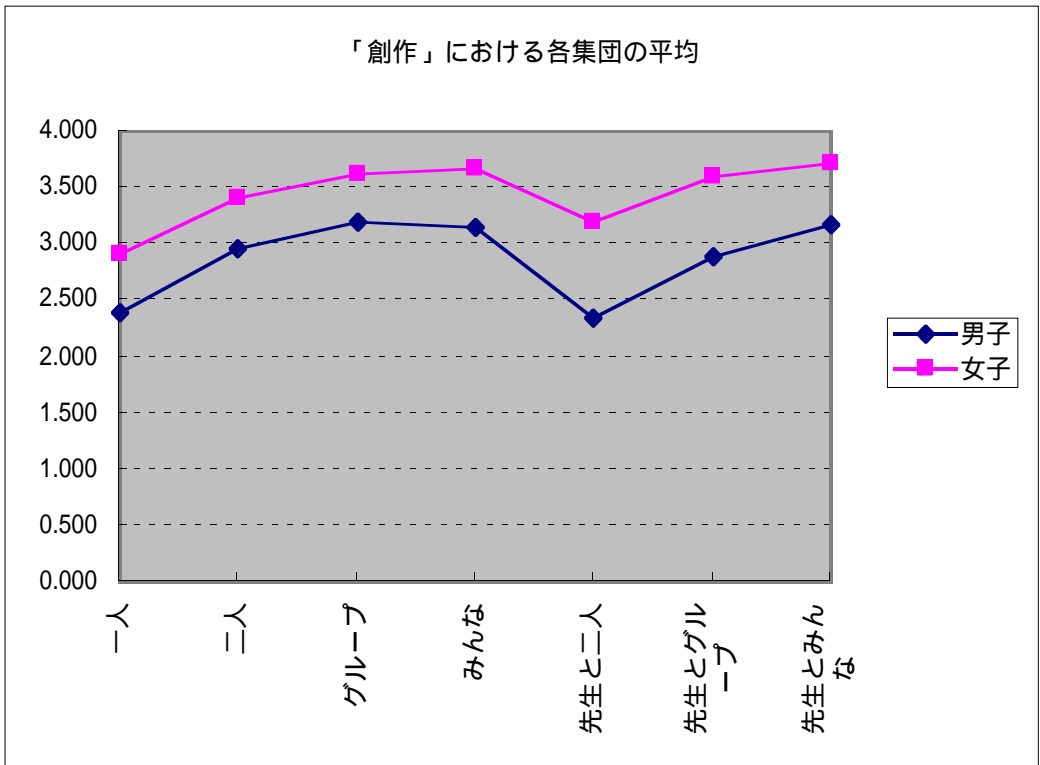
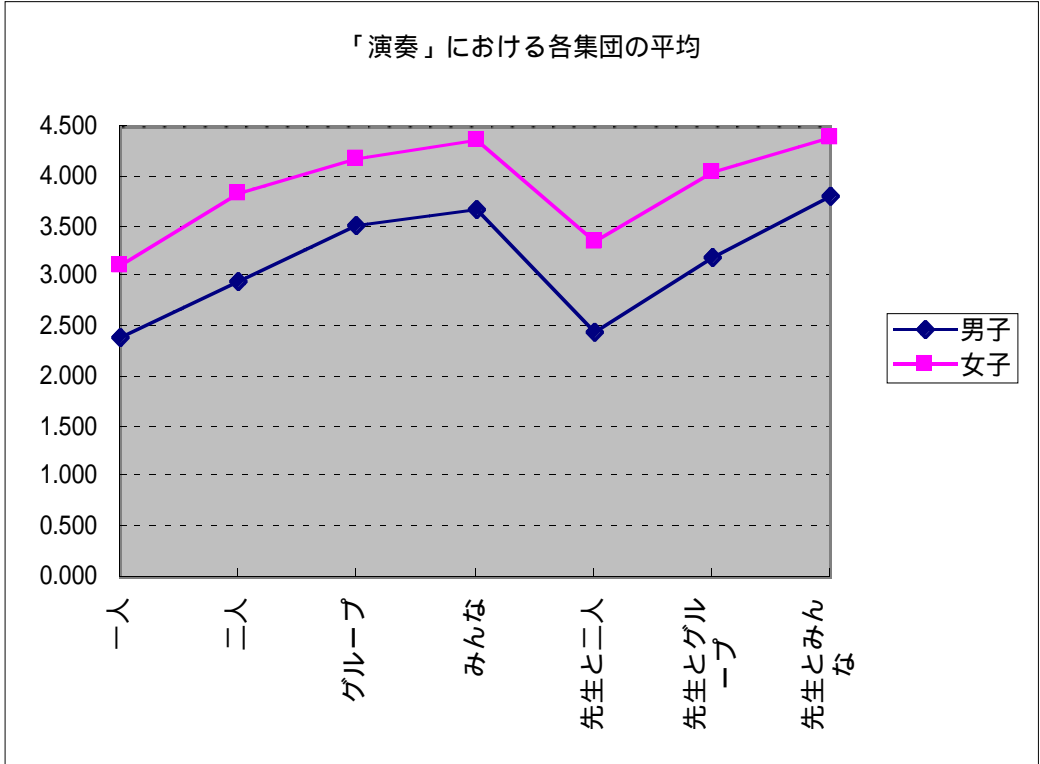
		一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	男子	3.070	3.465	3.776	3.741	2.441	3.297	3.713
	女子	3.588	4.124	4.195	4.180	3.322	4.004	4.288
歌唱	男子	2.465	3.269	3.661	3.850	2.336	3.241	3.696
	女子	3.004	3.816	4.131	4.255	3.180	3.959	4.285
演奏	男子	2.409	2.958	3.528	3.671	2.448	3.189	3.804
	女子	3.105	3.839	4.187	4.367	3.367	4.052	4.390
創作	男子	2.402	2.958	3.199	3.140	2.350	2.888	3.171
	女子	2.921	3.412	3.633	3.674	3.195	3.588	3.712
勉強	男子	2.017	2.395	2.783	2.846	2.262	2.675	2.909
	女子	2.820	3.363	3.442	3.446	3.176	3.438	3.618

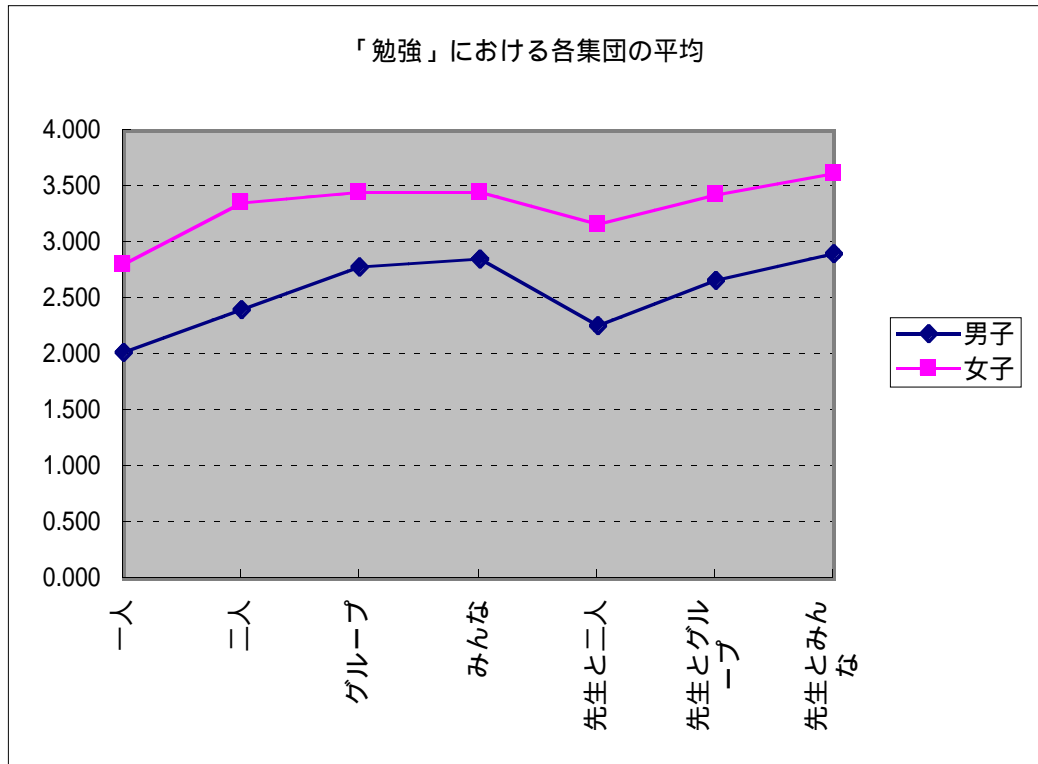












## 【結果と考察】

男女で比較すると、活動によってその差の大小に違いはあり、「鑑賞」「歌唱」が小さく、「勉強」が他に比べて大きい。全体的にどの活動も男子より女子の方が下回っている。

男女ともに「グループ」「みんな」「先生とみんな」が高く、男女の違いにかかわらず、一緒に活動する人数は多い方が、児童は音楽の授業は楽しいと感じているといえる。

またどちらかといえば、男子の方が女子よりも『集団』によって楽しさの変化は大きくなっている。最高点と最低点の差を調べたところ、以下の表のようになった。どの活動においても、男子の方が女子より最高点と最低点の差が大きくはないがひらいている。このことから、男子に比べて女子の方が、『集団』の形態にかかわらず音楽の授業を楽しんでいるといえる。

男子は、調査を行った対象のなかでも、ピアノを習ったりして授業以外に音楽的な活動をしている児童は女子よりも少ない。また、高学年は特に、男子よりも女子の方が音楽が得意であるというイメージがある。しかし音楽的経験がないために音楽の授業が女子よりも楽しいと感じにくいと一概にはいえない。

津守由加氏によれば、男子は女子に比べて「経験に基づいて音楽をこなすことより、自らでやってみようという方が好まれる」(注15)と述べている。これを考慮すると、男子は興味・関心をもてる教材や活動であれば音楽の授業を楽しんでいると思えることができると考えられ、そのため特に楽しそう、おもしろそうと思にくい「勉強」が女子に比べて低かったのではないだろうか。

また、「鑑賞」が小さかったのは「曲をきく」という行為が受け身的・消極的で、児童にとって男女や集団の状態にもかわらず、楽な状態であると感じているからではないだろうか。鑑賞とは、本来ある作品を意識を働かせて聴くという積極的な行為である。(注16)教師はただ楽な状態による楽しさではなく、積極的な行動による音楽の楽しさを児童に感じさせなければならぬ。そのため自己完結してしまわない、授業で曲を聴くという活動ならではの楽しさを感じられる授業を行わなければならない。

「歌唱」の差が小さかったのは、前にも述べたように『集団』にかかわらず「歌う」という行為が親しみやすく、楽器を演奏するよりも技術を必要としないために、音楽的経験のあるなしにかかわらずにでき、また、緊張するとうまく歌えないことからわかるように、歌うことで緊張感が解け、男女ともに解放された状態になるのではないだろうか。

		各活動の最高		各活動の最低		差
男子	鑑賞	グループ	3.776	先生と二人	2.441	1.336
	歌唱	みんな	3.850	先生と二人	2.336	1.514
	演奏	先生とみんな	3.804	一人	2.409	1.395
	創作	グループ	3.199	一人	2.402	0.797
	勉強	先生とみんな	2.909	一人	2.017	0.892
	平均		3.477		2.321	1.156
女子	鑑賞	先生とみんな	4.288	先生と二人	3.322	0.966
	歌唱	先生とみんな	4.285	一人	3.004	1.281
	演奏	先生とみんな	4.390	一人	3.105	1.285
	創作	先生とみんな	3.712	一人	2.921	0.790
	勉強	先生とみんな	3.618	一人	2.820	0.798
	平均		4.058		3.034	1.024

4、学年差について

発達の違いによって音楽の授業における楽しさが異なるかどうかを明らかにするために調査結果を学年によって比較した。

【集計結果】

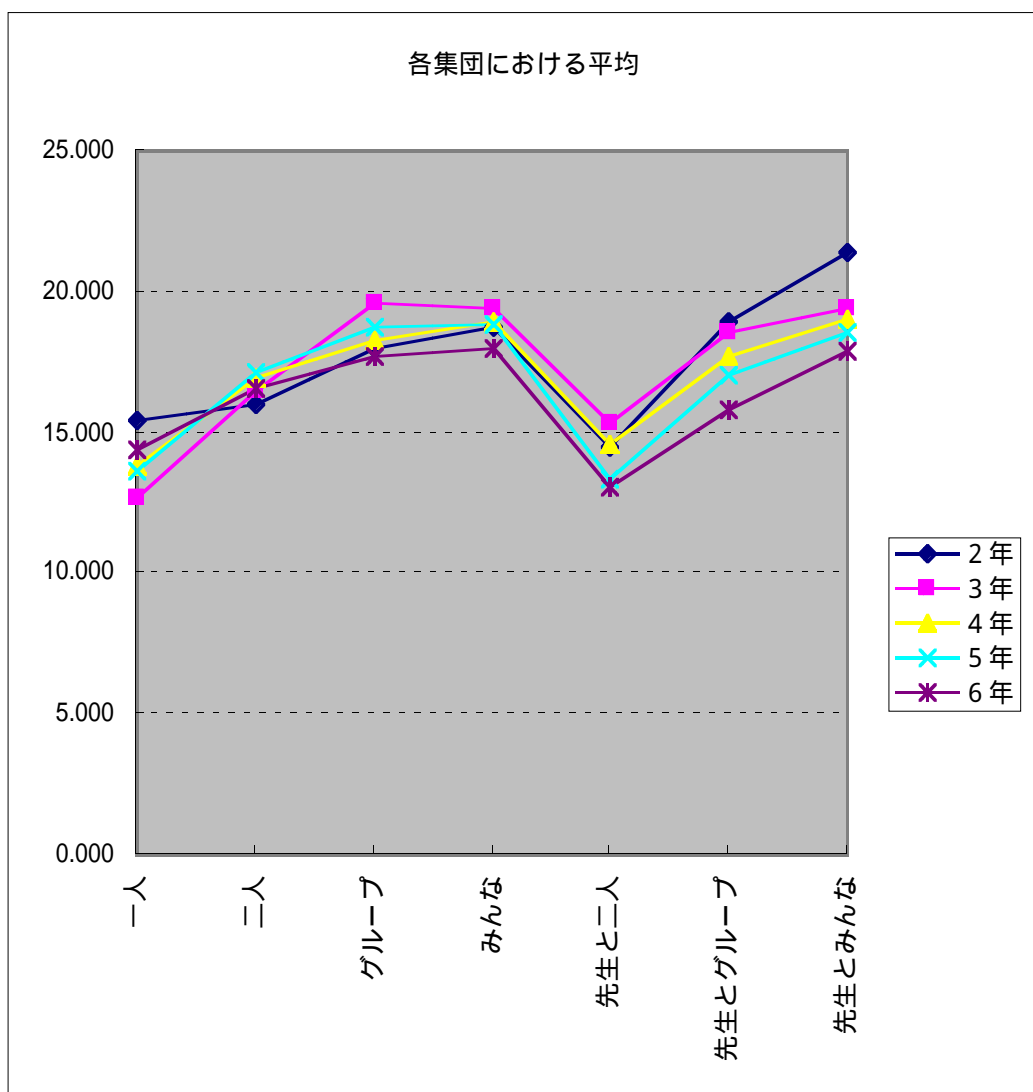
< 平均（活動別） >

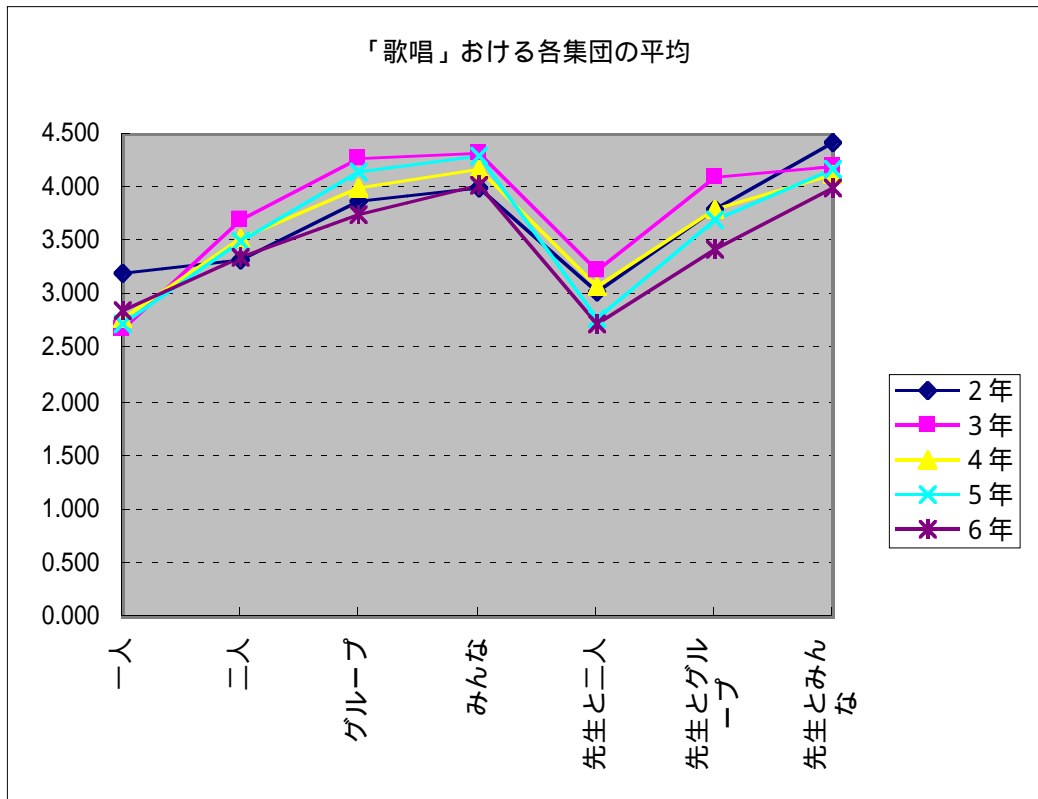
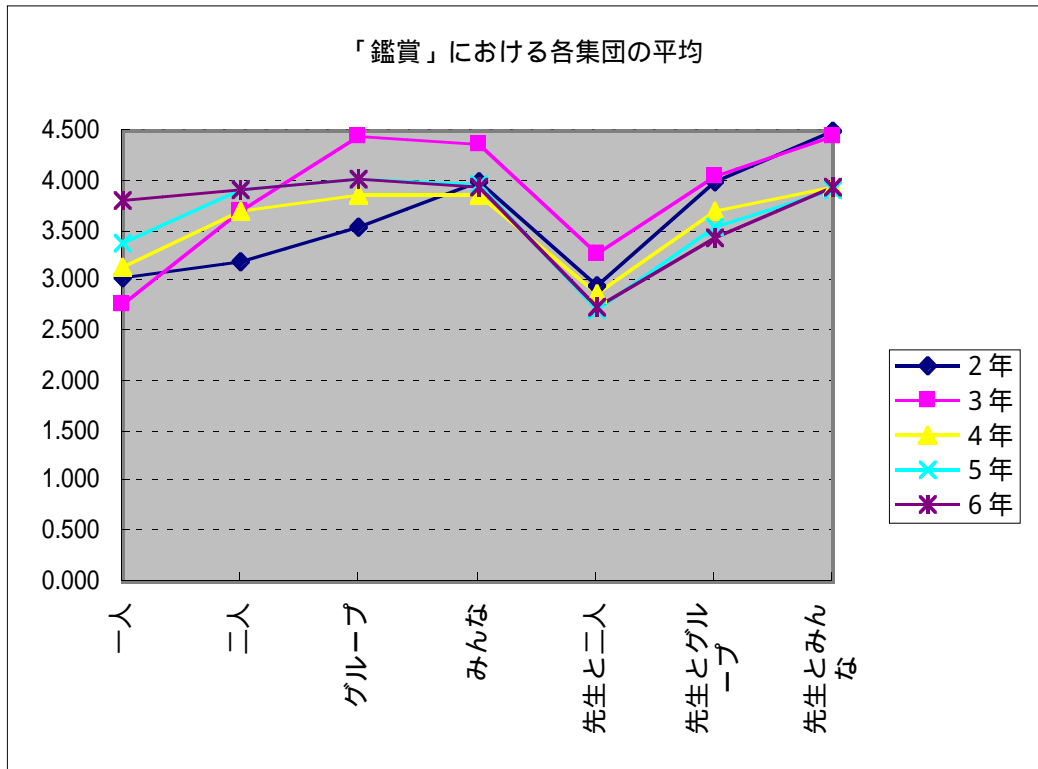
2年	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	3.042	3.208	3.542	4.000	2.958	4.000	4.500
歌唱	2.958	3.500	3.708	4.000	2.708	3.917	4.542
演奏	3.208	3.333	3.875	4.000	3.042	3.792	4.417
創作	3.542	3.125	3.500	3.500	2.875	3.875	4.000
勉強	2.708	2.875	3.375	3.292	2.875	3.375	3.917
3年	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	2.769	3.692	4.436	4.359	3.282	4.051	4.436
歌唱	2.000	2.949	3.923	3.923	2.846	3.744	3.923
演奏	2.692	3.692	4.282	4.333	3.231	4.102	4.205
創作	3.051	3.462	3.744	3.641	3.128	3.641	3.564
勉強	2.154	2.692	3.051	3.128	2.897	3.051	3.308
4年	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	3.155	3.695	3.855	3.864	2.873	3.695	3.945
歌唱	2.695	3.532	3.832	4.077	2.882	3.682	3.923
演奏	2.791	3.536	4.005	4.182	3.091	3.800	4.132
創作	2.691	3.264	3.450	3.500	2.877	3.286	3.564
勉強	2.509	2.923	3.177	3.273	2.845	3.205	3.509
5年	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	3.392	3.911	4.019	3.975	2.703	3.551	3.911
歌唱	2.696	3.627	3.949	4.082	2.620	3.538	4.032
演奏	2.747	3.506	4.146	4.291	2.778	3.709	4.171
創作	2.487	3.165	3.475	3.367	2.677	3.190	3.354
勉強	2.354	2.973	3.133	3.133	2.614	3.025	3.127
6年	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
鑑賞	3.813	3.920	4.009	3.938	2.750	3.429	3.929
歌唱	3.027	3.616	3.902	3.973	2.616	3.438	3.929
演奏	2.857	3.348	3.759	4.018	2.732	3.429	3.991
創作	2.446	2.974	3.098	3.134	2.482	2.884	3.116
勉強	2.277	2.723	2.902	2.920	2.482	2.679	2.946

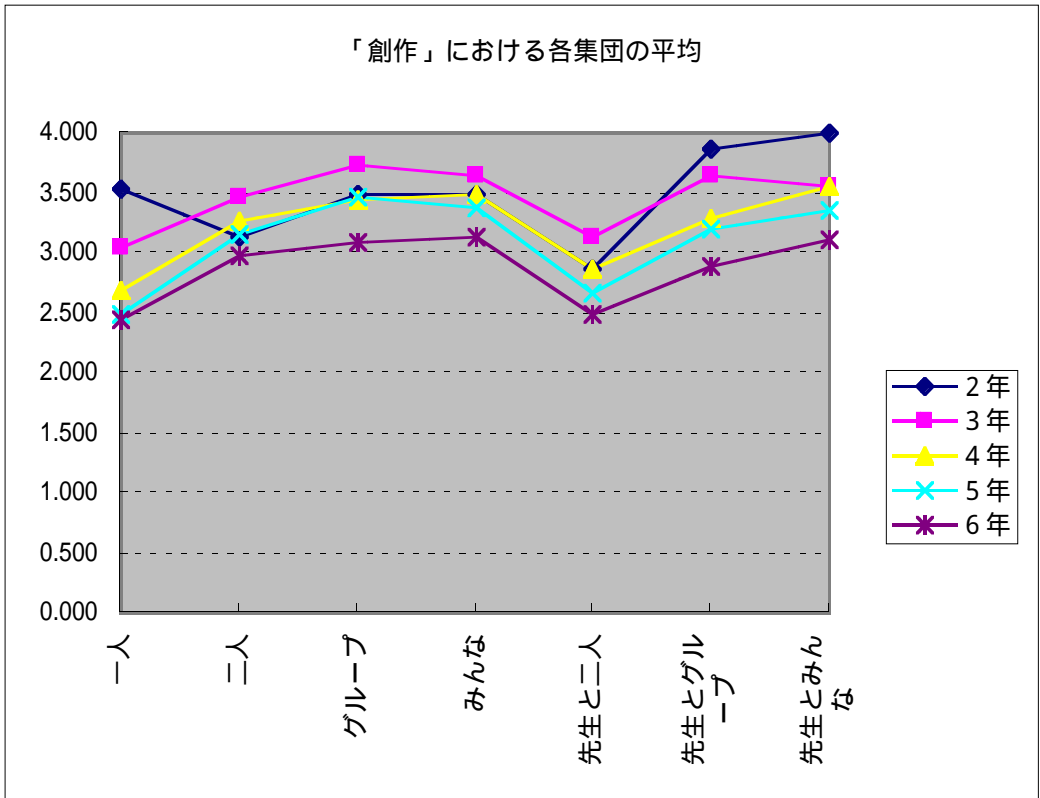
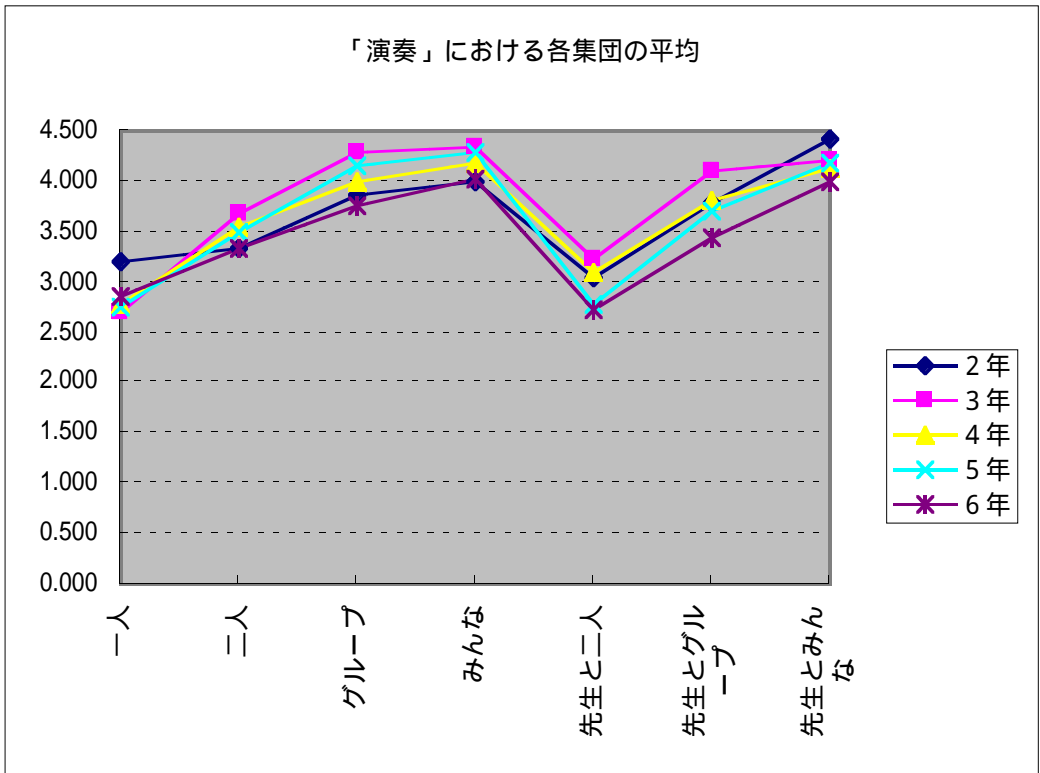
これによるグラフは以降のページに掲載した。

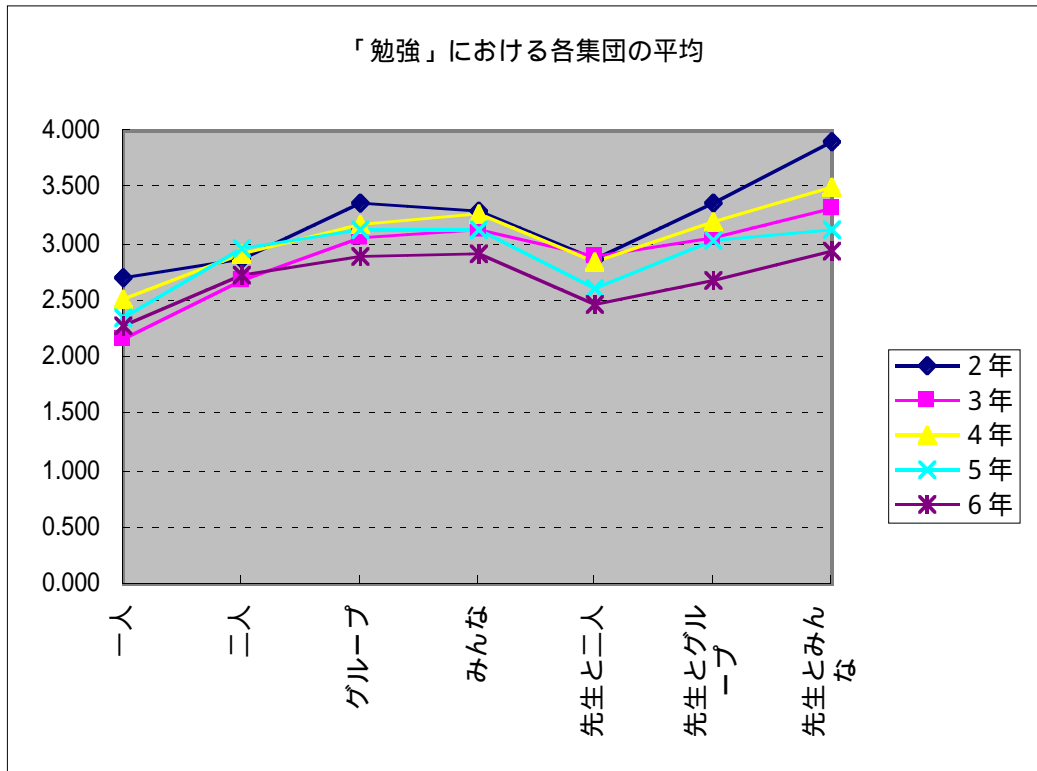
&lt; 平均 (全体) &gt;

	一人	二人	グループ	みんな	先生と二	先生とグ	先生とみ
2年	15.458	16.042	18.000	18.792	14.458	18.958	21.375
3年	12.667	16.487	19.564	19.385	15.385	18.590	19.436
4年	13.841	16.950	18.318	18.895	14.568	17.668	19.073
5年	13.677	17.146	18.722	18.848	13.392	17.013	18.595
6年	14.420	16.545	17.670	17.982	13.063	15.857	17.911









【結果と考察】

学年による違いは、「二人」「グループ」「みんな」においては特に大きな違いは見られなかったが、それ以外の、特に「先生とグループ」「先生とみんな」では、学年があがるにつれて次第に楽しいと感じにくくなっている。

各学年ごとに最低点と最高点の差を調べたところ、左の表のようになった。差が学年が上がるにつれて小さくなっているため、学年があがるにつれて楽しさは『集団』に左右されにくくなるといえる。

< 各学年の最高と最低 >

	最高		最低		差
2年	先生とみんな	21.375	先生と二人	14.458	6.917
3年	グループ	19.564	一人	12.667	6.897
4年	先生とみんな	19.073	一人	13.841	5.232
5年	みんな	18.595	先生と二人	13.392	5.203
6年	みんな	17.911	先生と二人	13.063	4.848



活動別に見ると、「鑑賞」においては、2、3年生に比べ、5、6年生は「一人」や「二人」の少ない人数でも楽しいと感じている。発達段階を考えると、低学年は高学年に比べ「所属の欲求」が強い。また、高学年になるにつれて自立心が育つため、「鑑賞」のような特に能動的でない活動は、一人ですることにも不安感が少ないと思われる。

「歌唱」「演奏」「勉強」は共に、『集団』の違いによって同じような変化をしている。また、その値も近い値を示しているため、この三つの活動は、学年による違いはあまりないといえる。

「歌唱」「演奏」は心身を解放し、またそれらの音楽は自己表現の表現としてしばしば言語よりも雄弁に語ることができる。また、人間は新しい事物や事象に絶えず関心を持ち、これらに働きかけていっそうの情報をひきだそうとしている。この知的好奇心(注17)は発達段階によって差があっても、必ず持っているものであり、「勉強」はこの知的好奇心を満足させることができる。これらの三つの活動は、このような理由で学年によって差があまりないと考えられる。

「創作」は他の活動に比べると学年によって少し差があり、『集団』によって楽しいという感じ方が異なっている。また、2年生は他の学年と比べ、一人で曲をつくることに抵抗を感じにくい。学校や学年によって具体的にどのような創作活動がなされているかによって、楽しさも変わると思われる。今回1年生に調査できなかったため、はっきりと結論付けはできないが、発達段階があがるにつれて自己満足の域から脱し、承認の欲求を得たいと思うようになるために、高学年ほど一人より複数の方が楽しいと感じるのではないかと考えられる。

### 【第2仮説の検証】

これまでに男女の違い、学年の違いによって考察してきた。男子が女子よりも音楽が楽しいとは感じていないことはある程度予想していたが、女子の方が男子よりも音楽の授業の感じ方が『集団』の違いによって左右されないということは意外であった。また、発達段階によって児童の考えや感じ方が変わるため、学年によ

って『集団』に対する関わり方や捉え方が異なり、活動によっては学年の差がみられるところもあった。

今までの考察により、第2仮説「性差・学年差によって児童が楽しいと感じる集団形態は異なる。」は一部成立する。また、学年ごとに楽しいと感じる『集団』形態は、活動によっても異なるといえる。

### 第3節 まとめ

これまでに、音楽の授業における楽しさが『集団』によって変わるということについて、考察してきた。

学校における集団には、集団によってさまざまな性格がある。そしてそれ以前に、個人の集まりである集団は、現在も研究が続けられているように、さまざまな性質・特性をもっている。学校という場所で複雑な、大人の集団とは違う変化しやすい集団に対して接していくには、その接し方も変わる必要がある。授業の内容が進度によって異なるように、授業の方法、行い方も同様である。楽しい音楽の授業をするためには、さまざまな児童がそれぞれにもっている、さまざまな特性を考慮しなければならない。また、活動の種類・男女の違い・学年の違いによってさまざまな変化をする「楽しさ」は、他に授業を行う教師によっても当然大きく異なってくると考えられる。社会の変化によって集団を構成する個人が変化するのであるから当然、集団とはつかみどころのないものである。例えば毎年同じ学年を担当しても、同じように教育することはできない。しかし「ソシオメトリー(sociometry)」という集団内の成員の相互関係や集団構造を記述・分析・評価するため(注18)のMorenoの理論のような手法を使うことによって、またこのような方法を使わないでも、その集団と積極的に関わり、また集団内の個人とも関わることで、集団を把握することは十分可能である。学校生活の基盤となっている集団のもつ性格をある程度つかんでしまえば、それはその集団に対する教師の大きな助けになるだろう。

例えば、集団成員相互の類似性を生み出す力である、斉一性への圧力(puressure to uniformity)に対して、集団成員が同調していく

同調行動 (coformity) という性質がある。(注 19) この研究者である Asch の実験で 12 回中一人平均 3 ~ 4 回、同調行動を示しているように、教師が集団の特徴をとらえていれば、例えばうまく歌を歌わないといわれるクラスでも歌をうまく歌わせることはできるのである。特に「歌唱」のように全員が全く同じ活動をする場合、この同調行動は重要なのではないだろうか。また授業だけでなく、静かに話を聞かせたときなどにも同じことがいえる。

今回の研究では、音楽の授業での楽しいと感じる感じ方は、その活動を行う『集団』によって異なり、また、同じ『集団』であっても活動によって感じ方が変わる事がわかった。いくつかの『集団』の形態のうち、ほとんどの児童が「一人」や「二人」よりも多い人数の方が楽しいと答えたのは、それぞれの個人の考え方や感じ方の違い、つまり個性の多様さに触れたり、逆にその多様さを持ち合わせた集団の中で共有することができる一体感を等しく感じる事ができるということが、児童を楽しいという気持ちにさせるのではないだろうか。

ただし、少数ではあったが、「一人」や「先生と二人」の方が楽しいという意見もあった。児童は全員、「みんな」でするのが楽しいと感じている、と、児童をひとくくりにして考えてしまうということは、それこそ、児童の集団としての認識が違っているといえるのではないだろうか。集団はあくまで個人の集まりであり、個人の集まりが集団であるという認識が大切なのではないかと私は考える。

授業における『集団』構成もさまざまな条件によって変化するという結果は、我々が周囲の人間関係に限らない環境や状況から影響を受けて変わっていくことを考えれば、当然ともいえる結果である。また男女の違いや学年の違いによっても同じであったことも、日々あるいは一日の中でも人間の考え方や感じ方が変わりうることを考えればわかる。しかしその事実を、学校の中で教師は、見落としがちになってしまうのではないだろうか。それは、教師が日常の忙しさに文字どおり忙殺され、ゆとりが持たなくなりがちであるからかもしれない。しかし周囲の状況に敏感に反応する児童に反応できないようでは、教師の資格があるとはいえない。児

童理解とそれに基づく授業によって「楽しい音楽の授業」は成り立つのではないだろうか。

#### 第4節 今後の課題

今後の課題としては、本研究で学んだことや考えたことをさらに深めていきたい。そしてそのなかで実際にそれぞれの『集団』としての児童と、個人としての児童に対する授業の方法を模索していきたいと思う。

#### おわりに

学校生活というものは、決して一人だけで送ることはできません。それは、大学でも、小学校でも同じです。さまざまな人と関わり合うことで、自分も変わり、周囲も変わっていきます。児童がより良い方向へ成長できるように、教師は児童ひとり一人と、児童の小さな社会としての彼らの集団を導いていかなければいけません。しかし、それは簡単なことではありません。思うように動いてくれないことはしばしばあります。逆に、思いがけない、うれしい行動をしてくれることもあります。音楽の授業では、児童が歌ってくれなかったり、静かに曲を聞いてくれなかったりします。一体どうすれば児童が教師の願うように行動してくれるのか、児童はどのようなことを楽しいと感じているのか、という疑問から、この研究は始まりました。

研究を進めれば進めるほど、この研究の深さに道のりの遠いことをひしひしと感じました。この研究をきっかけにこの研究を深め、もっとさまざまなものに目を向けて、「知的好奇心」を膨らませていきたいと思います。

今回の研究にあたっては、多くの方々のご協力をいただきました。アンケートを行うにあたって、急な依頼にも関わらず快く引き受けてくださった、近都美直子先生、寺田英子先生、橋本里美先生、大西小百合先生、そして児童のみなさん、お忙しい時期にご協力いただき、心よりお礼申し上げます。また、多くの助言と励ましをくださった同ゼミの中野さん、谷口さん、葉袋さん、大熊さん、松阪さん、そして多くの友人・知人に感謝いたします。

最後になりましたが、本研究にあたって惜しめない寛大なご指導とご助言をくださいました鈴木寛先生に心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

1998年 1月20日 伊藤正子

## 引用文献

- (注1)田中熊次郎:「新訂 児童集団心理学」1975 明治図書 p20
- (注2)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p139
- (注3)田中熊次郎:「新訂 児童集団心理学」1975 明治図書 p30
- (注4)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p1848
- (注5)岡本 啓:「現代社会における音楽教育の意義 - 音楽教育の将来的展望 - 」1990 兵庫教育大学修士論文 p.98
- (注6)岡本 啓:「現代社会における音楽教育の意義 - 音楽教育の将来的展望 - 」1990 兵庫教育大学修士論文 p.99-101
- (注7)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p139
- (注8)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p142
- (注9)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p61
- (注10)千駄忠至、森田啓之:「スポーツの楽しさに関する研究」1992 体育・スポーツ科学 第2号(1993)抜刷 p.5-6
- (注11)文部省:『小学校指導書 音楽編』1989 教育芸術社 p.4
- (注12)中村めぐみ「楽しい音楽の授業を目指す指導の研究」1989 兵庫教育大学卒業論文 p9-10
- (注13)中村めぐみ「楽しい音楽の授業を目指す指導の研究」1989 兵庫教育大学卒業論文 p42-50
- (注14)貫行子:「"刺激的"音楽と"鎮静的"音楽に対する生理学的・心理学的反応」1984 音楽学会 p244
- (注15)津守由加:「音楽的能力の性差についての研究」1990 兵庫教育大学卒業論文 p69
- (注16)園部三郎:「下手でもいい、音楽の好きな子供を」1975 音楽之友社 p65
- (注17)波多野誼余夫、稲垣佳世子:「知的好奇心」1973 中央公論 p58
- (注18)岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社 p181-182
- (注19)鈴木清編:「心理学 経験と行動の科学」1988 ナカニシヤ出版 p100

## 参考文献

- 新村 出(編): 広辞苑 第四版 1991 岩波書店
- 岸本弘、柴田義松、渡部洋、無藤隆、山本政人編:「教育心理学用語辞典」1994 学文社
- 中村めぐみ:「楽しい音楽の授業を目指す指導の研究」1989 兵庫教育大学卒業論文
- 寺田英子:「音楽の授業における教師の言語活動と児童の反応についての考察」1995 兵庫教育大学卒業論文
- 橋本里美:「音楽学習の妨げとなる要因の研究」1996 兵庫教育大学修士論文
- 千駄忠至、森田啓之:「スポーツの楽しさに関する研究」1992 体育・スポーツ科学 第2号(1993)抜刷
- J.L.Mursell(美田節子訳):『音楽教育と人間形成』1967 音楽之友社
- RADOCY,Rodolf E. & BOYLE,J.David.(徳丸吉彦、藤田芙美子、北川純子共訳):『音楽行動の心理学』1985 音楽之友社
- Csikszentmihalyi,M.(今村浩明訳):『楽しむということ』1991 思索社
- 岡本 啓:「現代社会における音楽教育の意義 - 音楽教育の将来的展望 - 」1990 兵庫教育大学修士論文

- 田中熊次郎：『新訂 児童集団心理学』  
1975 明治図書
- 波多野誼余夫、稲垣佳世子：『知的好奇心』  
1973 中央公論
- 津守由加：『音楽的能力の性差についての研究』  
1991 兵庫教育大学卒業論文
- 池田千代：『児童の歌唱における心理的要因に  
についての研究』 1994  
兵庫教育大学卒業論文
- 近藤 卓：『見つめられ欲求と子ども』  
1990 大修館書店
- 鈴木清編：『心理学 経験と行動の科学』  
1988 ナカニシヤ出版
- 園部三郎：『下手でもいい、音楽の好きな子供  
を』 1975 音楽之友社
- 貫行子：『“刺激的”音楽と“鎮静的”音楽  
に対する生理学的・心理学的反応』 1984  
音楽学会
- 加藤諦三：『「はずかしさ」の心理 肩のこらな  
い気持ちの持ちかた』 1990 三笠書房
- 木下芳子（責任編集）：『新・児童心理学講座  
第8巻『対人関係と社会性の発達』 1992  
金子書房
- 安香宏・小川捷之・空井健三（編）：『臨床心理  
学大系第10巻 適応障害の心理臨床』  
1992 金子書房
- 片桐雅隆：『プライバシーの社会学 相互行為・  
自己・プライバシー』 1996 世界思想社
- 村井靖児：『音楽療法の基礎』 1995  
音楽之友社
- 浜野政雄、西園芳信、山本文茂（編）：『子供と  
音楽 第3巻「子供の生活と音楽」』  
1987 同朋社